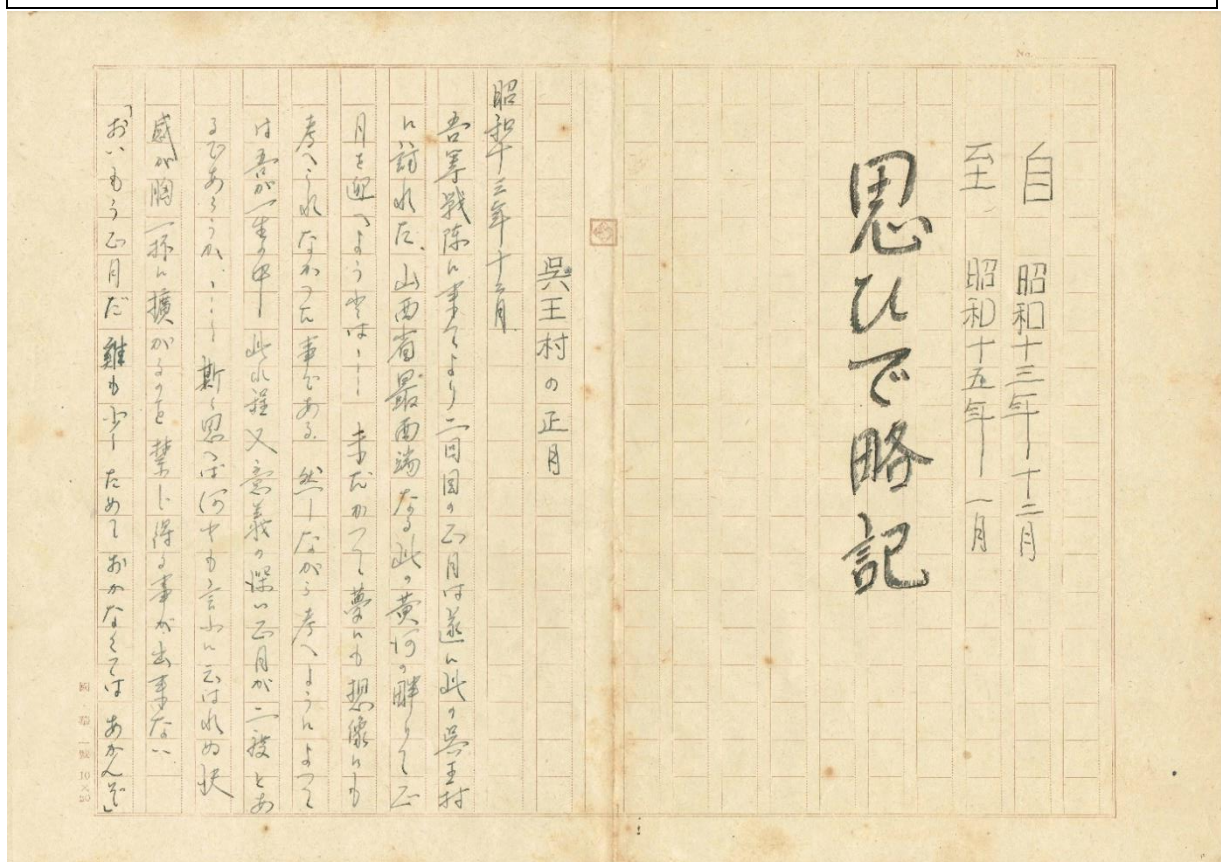


日中戦争思ひで略記（北支戦線：1938年12月25日～1939年4月30日）

（注）○は判読不能文字、【 】内および□内は判読者の注記、※は引用資料に関する引用者の注釈等、[] 内は資料出所を示す。明らかな誤字・当て字等は訂正し、日記本文・引用文とも句読点および濁点を適宜加除した。



【兵籍簿の関連記載 履歴：昭和13年12月1日より昭和14年1月14日迄 南部山西軍掃闢戦ニ参加】

- （参考）大陸命第241號 命令
- 大本營ノ企圖ハ占據地域ヲ確保シテ其安定ヲ促進シ、健實ナル長期攻圍ノ態勢ヲ以テ、殘存抗日勢力ノ制壓衰亡ニ勉ムルニ在リ。
 - 北支那方面軍司令官ハ、現ニ占據シアル北支那地方ノ確保安定ニ任ズベシ、特ニ先ヅ北部河北省、山東省、北部山西省 並 蒙 疆 地方ニ於ケル要域ノ迅速ナル治安ノ恢復ヲ圖リ、且 主要交通線ヲ確保スルヲ要ス。西蘇尼特、包 頭、黄河及黄河氾水地域ヲ越エテ作戰スル場合ハ別命ニ依ル。（第3項以下省略）
- 昭和13年12月2日 奉勅傳宣 參謀總長 載 仁 親王

【アジア歴史資料センターC14060918600 大陸命(防衛省) 画像3枚目】

自 昭和13年12月 至 昭和15年1月 思ひで略記

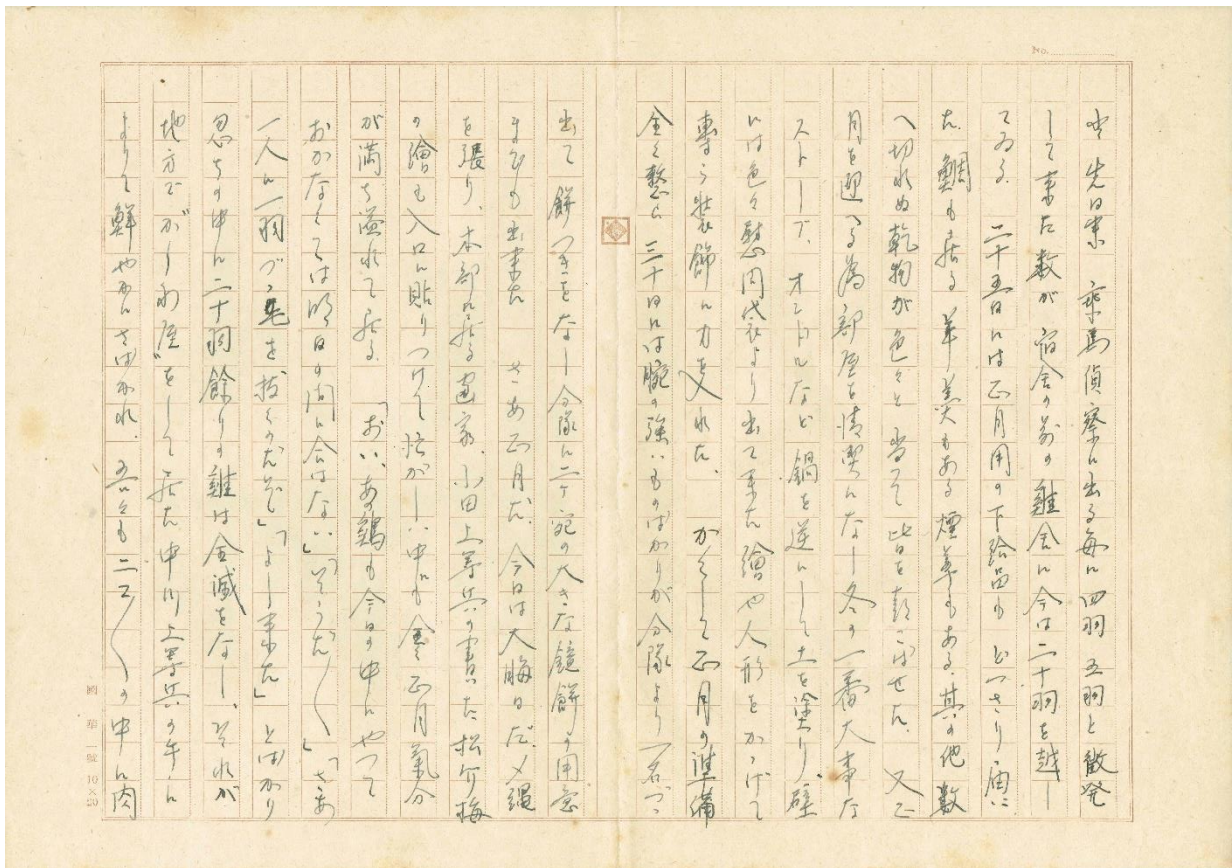
吳王村【思22頁の地図を参照】の正月

昭和13年【1938年】12月

吾等戦陣に来てより2回目の正月は、遂に此の吳王村に訪れた。山西省最西端なる此の黄河の畔りで正月を迎へようとは…、未だかつて夢にも想像にも考へられなかった事である。

然しながら考へようによつては、吾が一生の中、此れ程又意義の深い正月が2度とあるであろうか…。斯く思へば何とも言ふに云はれぬ快感が胸一杯に擴がるのを禁じ得る事が出来ない。

「おい、もう正月だ、鶏も少しためておかなくては、あかんぞ」



と、先日来、乗馬偵察に出る毎に4羽、5羽と徴発して来た数が、宿舎の前の鶏舎に、今は20羽を越してゐる。

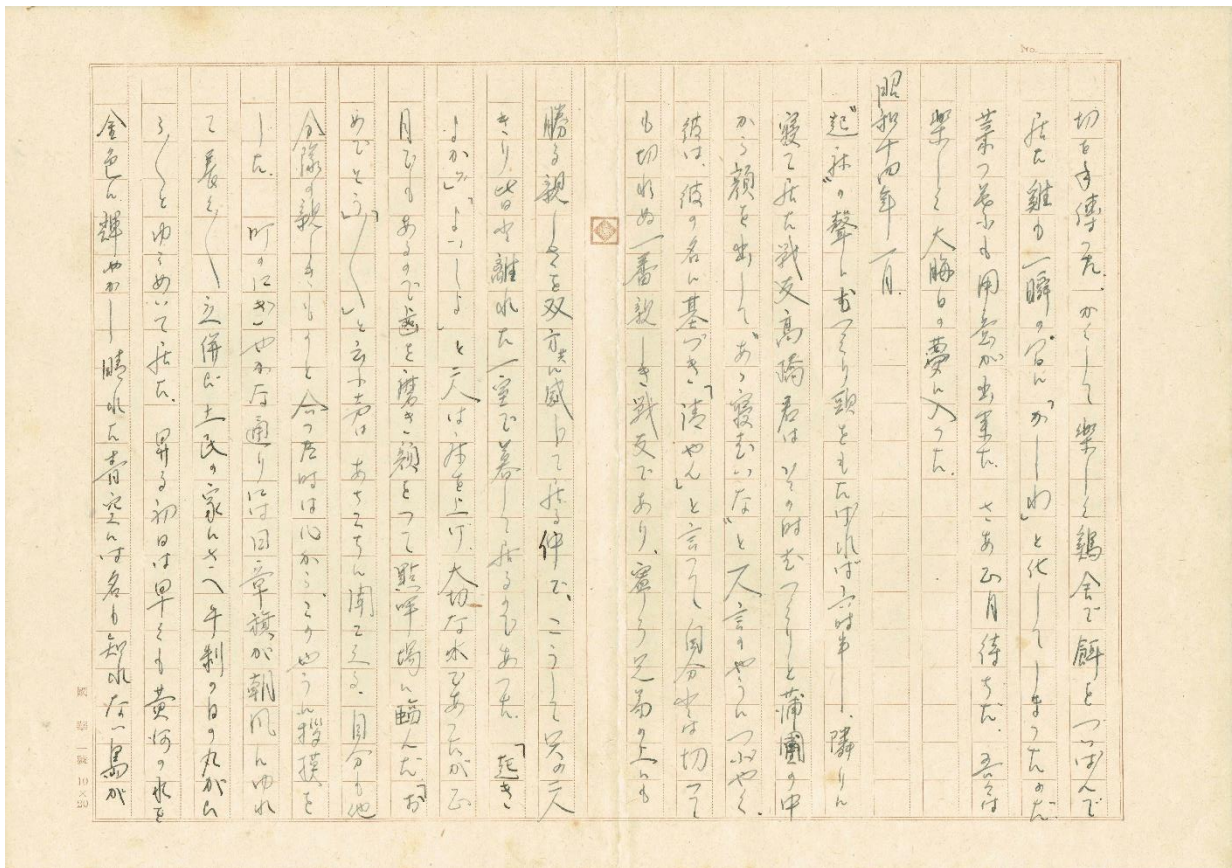
【1938年12月】25日には正月用の下給品もどっさり届いた。

鯛も居る、羊羹もある、煙草もある、其の他数へ切れぬ乾物が色々と当って、皆を款こばせた。又、正月を迎へる為、部屋を清潔になし、冬の一番大事なストーブ、オンドルなど、鍋を逆にして土を塗り、壁には色々慰問袋より出て来た^絵繪や人形をかゝげて、専ら装飾に力を入れた。かくして正月の準備全く整ひ、30日には腕の強いものばかりが分隊より1名づゝ出て餅つきをなし、分隊に2ヶ宛の大きな鏡餅の用意までも出来た。

さあ正月だ、今日は大晦日だ。

^{しめなわ}縄を張り、本部に居る画家、小田上等兵の書いた松竹梅の^絵繪も入口に貼りつけて、忙がしい中にも全く正月^気気分が満ち溢れて居る。

「おい、あの鶏も今日の中にやっておかなくては、明日の間に合はない」、「そうだそうだ」、「さあ、1人に1羽づゝ毛を抜くのさぞ」、「よし来た」とばかり、^{たちま}忽ちの中に20羽^余餘りの鶏は全滅をなし、それが地方で“かしわ屋”をして居た中川上等兵の手によりて、鮮やかにさばかれ、吾々もニコニコの中に、肉



切を手傳^伝った。

かくして^楽しく鶏舎で餌をついばんで居た鶏も一瞬の間に「かしわ」と化してしまったのだ。

菜っ葉も用意が出来た。

さあ正月待ちだ。吾々は^楽しく大晦日の夢に入った。

昭和 14 年 1 月

“起床”の^声にむっくり頭をもたげれば 6 時半、隣りに寝て居た戦友高橋君は、その時むっくりと蒲團^団の中から顔を出して、“あゝ眠むたいな”と一人言のやうにつぶやく。

彼は彼の名に基づき「清やん」と言っ、自分とは切っても切れぬ一番親しき戦友であり、^む寧ろ兄弟の上にも勝る親しさを双方共に感じて居る仲で、こうして只の 2 人きり、皆と離れた一室で暮して居るのであった。

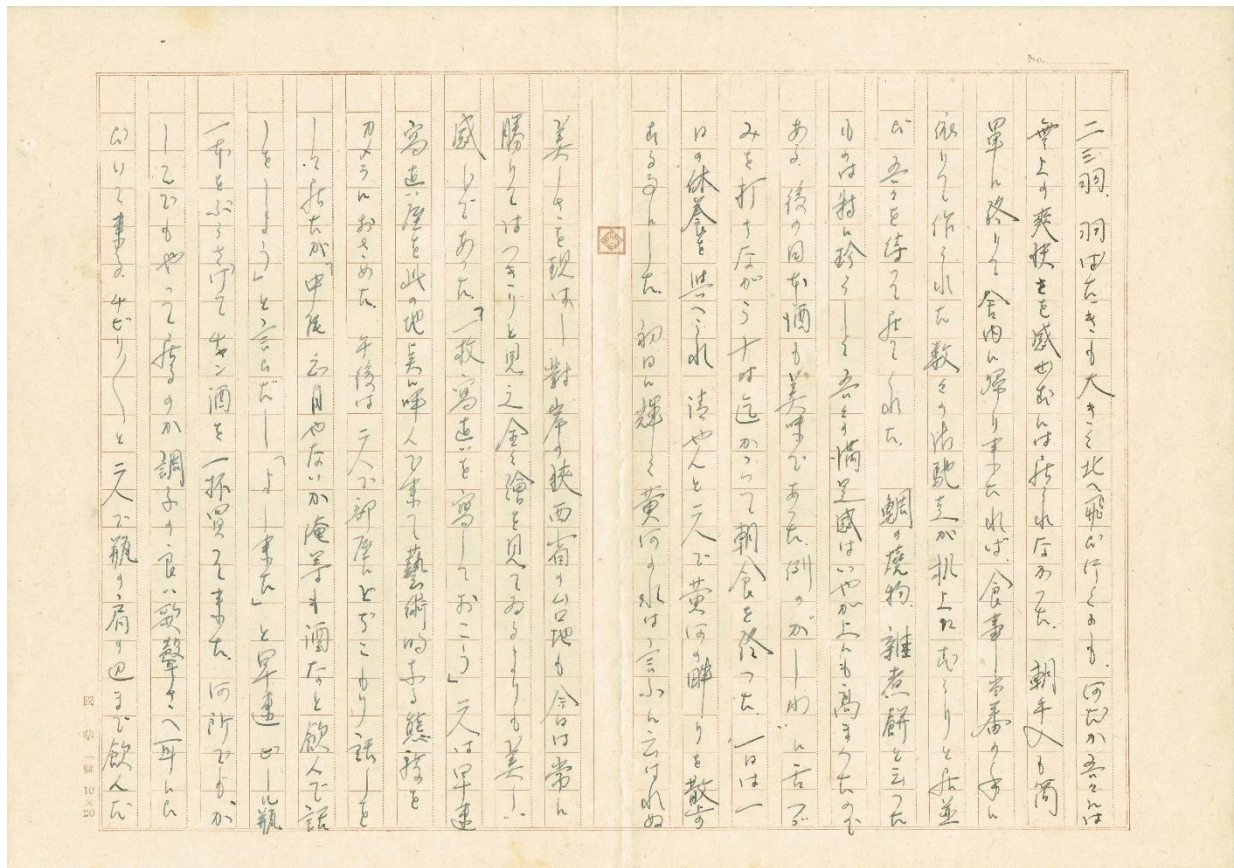
「起きよかッ」、「よいしょ」と 2 人は床を上げ、大切な水であったが正月でもあるので歯を磨き、顔を【洗】つて^点點呼場に臨んだ。

「おめでとう」、「おめでとう」と云ふ声はあちこちに聞こえる。

自分も他分隊の親しきものと会った時は、心からこのやうに挨拶をした。

町のにぎやかな通りには日章旗が朝風にゆれて長く長く立並び、土民の家にさへ手製の日の丸がひらひらとゆらめいて居た。

昇る初日は早くも黄河の水を金色に輝やかし、晴れた青空には名も知れない鳥が



2・3羽、羽ばたきも大きく北へ飛び行くのも、何だか吾々には無上の爽快さを感じずには居られなかった。

朝手入も簡単に終りて舍内に帰り来たれば、食事当番の手に依りて作られた数々の御馳走が机上にずらりと居並び、吾々を待って居てくれた。

鯛の焼物、雑煮、餅と云ったものは特に珍らしく、吾々の満足感はいやが上にも高まったのである。後の日本酒も美味であった。

例の“かしわ”に舌つゞみを打ちながら、10時迄かゝって朝食を終った。

【1939年1月】1日は1日の休養を^与與へられ、清やんと2人で黄河の畔りを散歩する事にした。

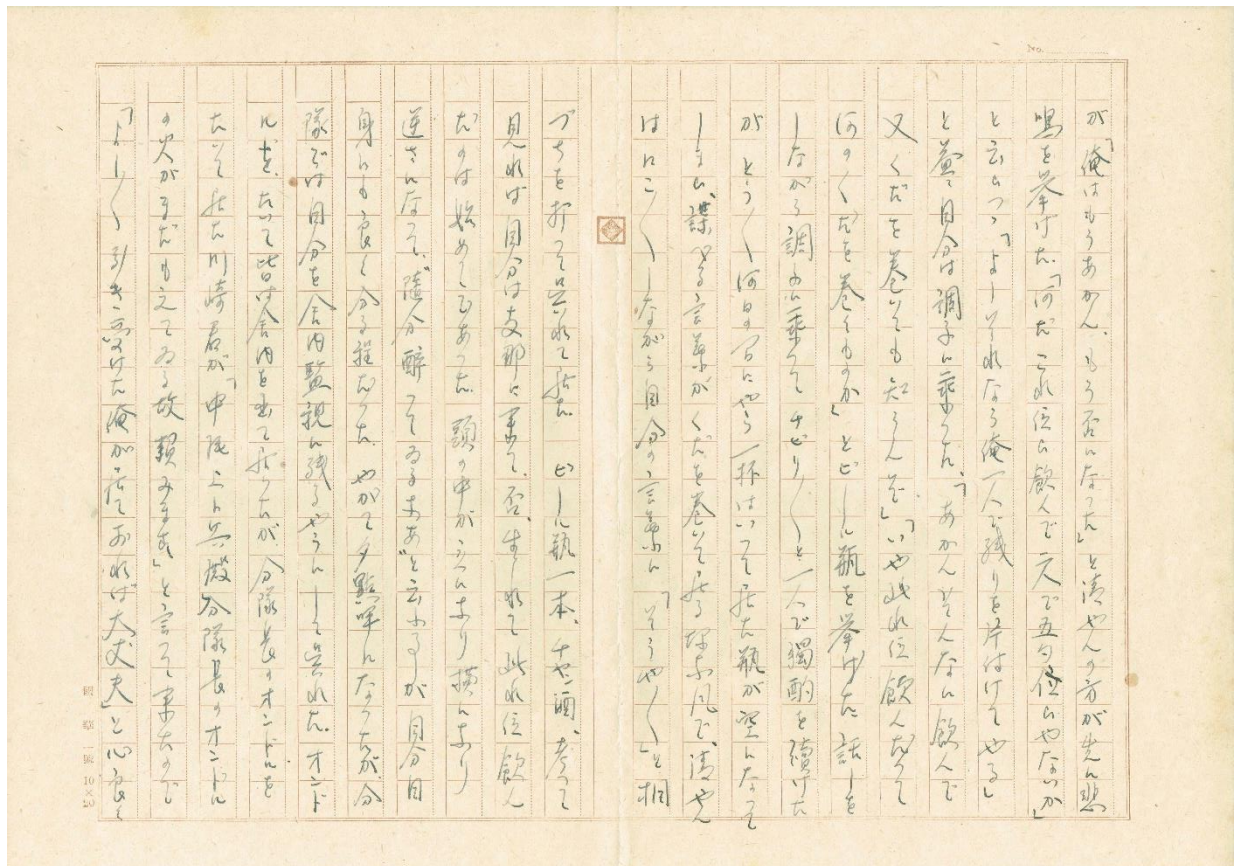
初日に輝く黄河の水は、言ふに云はれぬ美しさを現はし、^対對岸の^{せんせい}陝西省の台地も今日は常に勝りてはつきりと見え、全く^繪繪を見てゐるよりも美しい感じであった。

「1枚^写寫真を^写寫しておこう」、2人は早速^写寫真屋を此の地点に呼んで来て、^芸藝術的な態度をカメラにおさめた。

午後は2人で部屋にとちこもり話しをして居たが、「中尾、正月やないか、俺等も酒など飲んで話しをしよう」と言ひだし、「よし来た」と早速ビール瓶1本をぶらさげてチャン酒を1杯買って来た。

何所でもかしこでも、やって居るのか、調子の良い^声歌聲さへ耳にひびいて来る。

チビリチビリと2人で瓶の肩の辺まで飲んだ



が、「俺はもうあかん。もう^{イヤ}否になった」と清やんの方が先に悲鳴を挙げた。

「何だ、これ位ひ飲んで2人で5勺【90 ml】位ひやないか」と云ひつゝ、「よし、それなら俺1人で残りを片付けてやる」と益々自分は調子に乗った。

「あかん、そんなに飲んで、又くだを巻いても知らんぞ」、「いや、此れ位飲んだって何のくだを巻くものか」とビール瓶を挙げた。

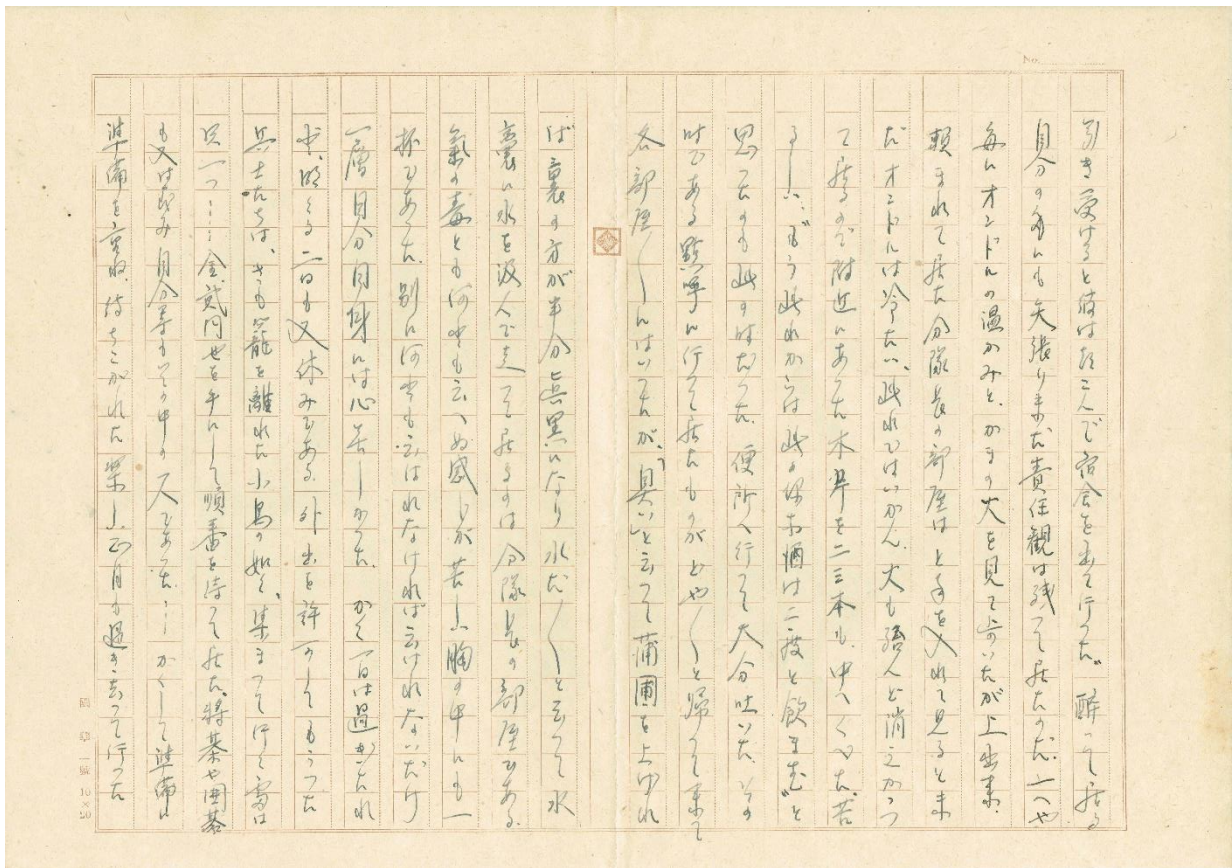
話しをしながら調子に乗ってチビリチビリと一人で^独酌を^続けたが、とうとう何日の間にやら、一杯はいつて居た瓶が空になってしまひ、喋べる言葉がくだを巻いて居る様な風で、清やんはにこにこしながら自分の言葉に「そうやそうや」と相づちを打って呉れて居た。

ビール瓶1本、チャン酒、考へて見れば、自分は支那に来て、否、生れて此れ位飲んだのは初めてであつた。

頭の中が縦になり横になり、逆さになって“随分酔つてゐるなあ”と云ふ事が自分自身にも良く分る程だつた。

やがて夕^点點呼になつたが、分隊では自分を舍内監視に残るやうにして呉れた。

オンドルをたいて皆は舍内を出て行つたが、分隊長のオンドルをたいて居た川崎君が「中尾上等兵殿【兵歴簿によると、この時点では未だ1等兵のはずであり、上等兵になった1939年6月1日以降にこの文章を書いたために間違つたのではないか?】、分隊長のオンドルの火がまだもえてゐる故、頼みます」と言つて来たので、「よしよし、引き受けた、俺が居ておれば大丈夫」と快く



引き受けると、彼は款こんで宿舍を出て行った。酔って居る自分の身にも矢張りまだ責任感が残って居たのだ。一へや毎にオンドルの温かみと、かまの火を見て歩いたが、上出来、頼まれて居た分隊長の部屋はと手を入れて見ると、未だオンドルは冷たい。

此れではいかん、火も殆んど消えかゝって居るので、附近にあった木片を2・3本も中へくべた。

苦しい。“もう此れからは此の様な酒は2度と飲まむ”と思ったのも此の時だった。

便所へ行って大分吐いた。その時である。点呼^点に行つて居たものがどやどやと帰つて来て、各部屋部屋にはいったが、「臭い」と云つて蒲團^団を上げれば裏の方が半分真黒^真になり、水だ水だと云つて水囊^{すいのう}の水を汲んで走って居るのは分隊長の部屋である。

氣^気の毒とも何とも云へぬ感じが苦しい胸の中にも一杯であつた。

別に何とも云はれなければ云はれないだけ、一層自分自身には心苦しかった。

かく1日は過ぎたれど、明くる2日も又休みである。

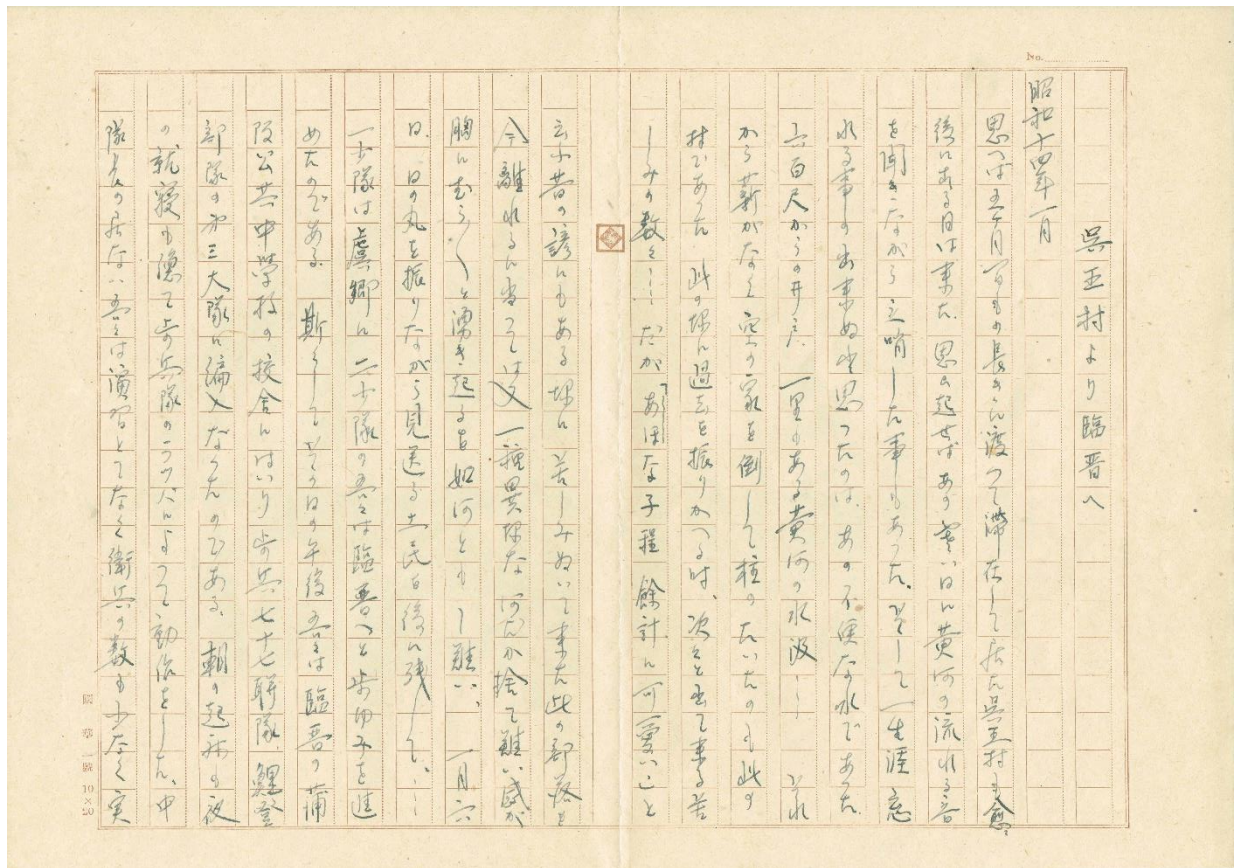
外出を許可してもらつた兵士たちは、さも籠を離れた小鳥の如く、集ま^処て行く處は只一つ…。

金2円也を手にして順番を待つて居た。

(参考) おそらく慰安所のことであろう。ちなみに「Aの日記」35頁では俸給(月額)8円80銭、「Dの日記」40頁ではボーナス6円である(物価については「日中戦争の随想」8・14頁を参照)。なお、草森神一著「不許可写真」90頁に掲載されている上海の慰安所の貼紙の写真でも「入場券、料金左ノ如シ、下士官・兵・軍属 金貳²円」となっている。

將棋や囲碁も又はずみ、自分等もその中の一人であつた…。

かくして準備に準備を重ね、待ちこがれた楽しい正月も過ぎ去つて行った。



呉王村より^{りんしん}臨 晋【思 22 頁の地図を参照】へ

昭和 14 年【1939 年】1 月

思へば 5 ヶ月間もの長きに渡って滞在して居た呉王村も愈々^{いよいよ}後にする日は来た。

思ひ起せば、あの寒い日に黄河の流れる音を聞きながら立哨した事もあった。そして一生涯忘れる事の出来ぬと思ったのは、あの不便な水であった。6 百尺【≒180m】からの井戸、1 里【≒4km】もある黄河の水汲…。それから薪がなく、空の家を倒して柱のたいたのも、此の村であった。

此の様に過去を振りかへる時、次々と出て来る苦しさの数々…。だが、「あほな子程、^余餘計に可愛い」と云ふ昔の諺にもある様に、苦しみぬいて来た此の部落を今離れるに当っては、又一種異様な、何だか捨て難い感が胸にむらむらと湧き起るを如何ともし難い。

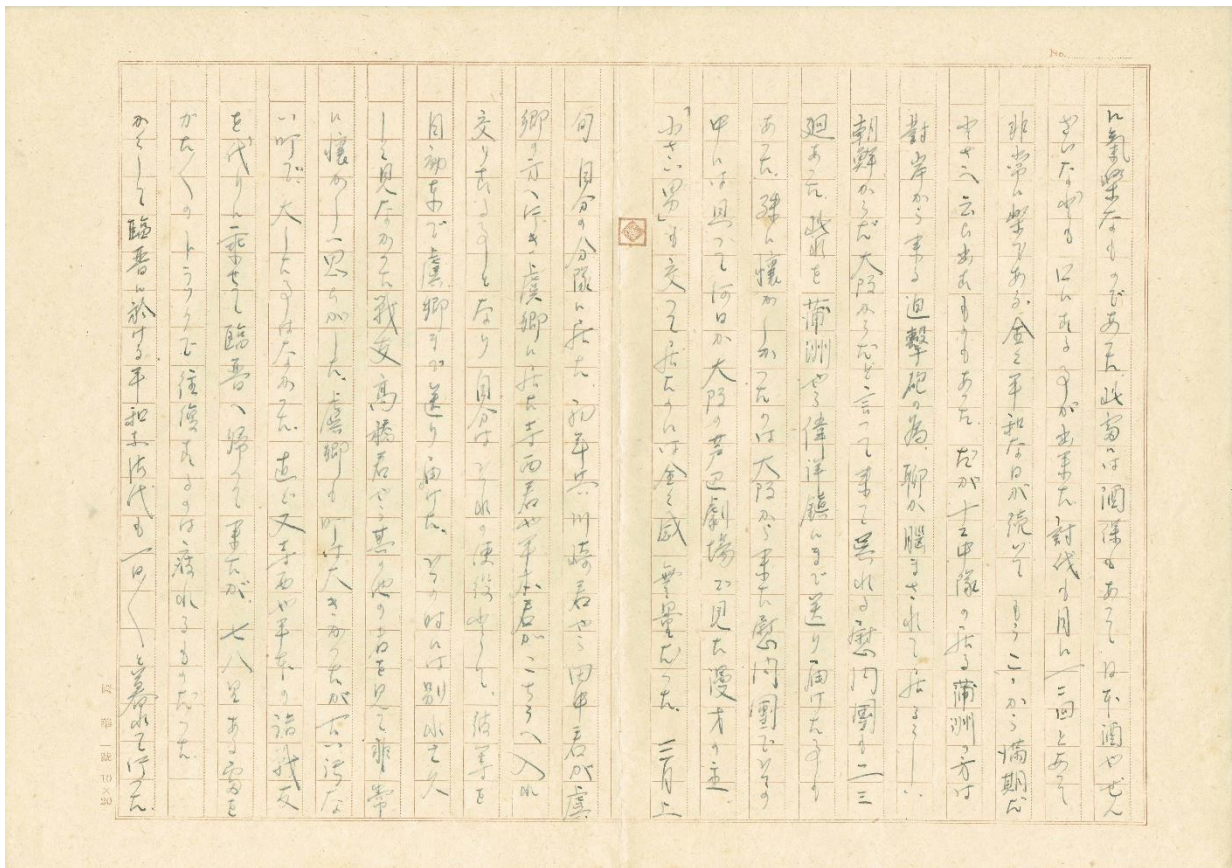
1 月 6 日、日の丸を振りながら見送る土民を後に残して…、一小隊は^{ぐきょう}虞郷に、二小隊の吾々は^{りんしん}臨 晋へと歩ゆみを進めたのである。

斯くしてその日の午後、吾々は臨晋の蒲阪公共中學校の校舎に【^{こい}宿舍として】はいり、歩兵七十七連^{こいと}連隊、鯉登部隊の第三大隊に編入なのである。【E の日記 E 26 頁で歩兵第 39 旅団付になっていたのが、歩兵七十七連隊(連隊長 鯉登行一)付に変わったか? 中尾敏郎の兵籍簿にはこれらの履歴は書かれておらず、野砲兵第 26 連隊第 10 中隊のままである】

【兵籍簿の関連記載 履歴：昭和 14 年 1 月 15 日より 5 月 25 日迄 第一期肅清戦ニ参加】

朝の起床も、夜の就寝も^総總て歩兵隊のラッパによって動作をした。

中隊長の居ない吾々は演習とてなく、衛兵の【^{当番}番】数も少なく実



に気^楽なものであった。此^処には酒保もあつて日本酒やぜんざいなども口にする事が出来た。
討伐も月に1・2回とあつて、非常に^楽である。

全く平和な日が続いて、もうこゝから満期だとさへ云ひ出すものもあつた。

だが、十二中隊の居る^{ほしゅう}蒲州^対の方は、對岸から来る迫撃砲の為、^{いささ}聊^悩か悩されて居るらしい。
朝鮮からだ、大阪からだと言つて来て呉れる慰問^団も、2・3組あつた。

此れを蒲洲やら偉洋鎮にまで送り届けた事もあつた。

殊に懐かしかったのは、大阪から来た慰問^団で、その中には且つて^{いつ}何日か大阪の芦辺劇場で見た漫才の主「小さい男」も交つて居たのには全く感無量だった。

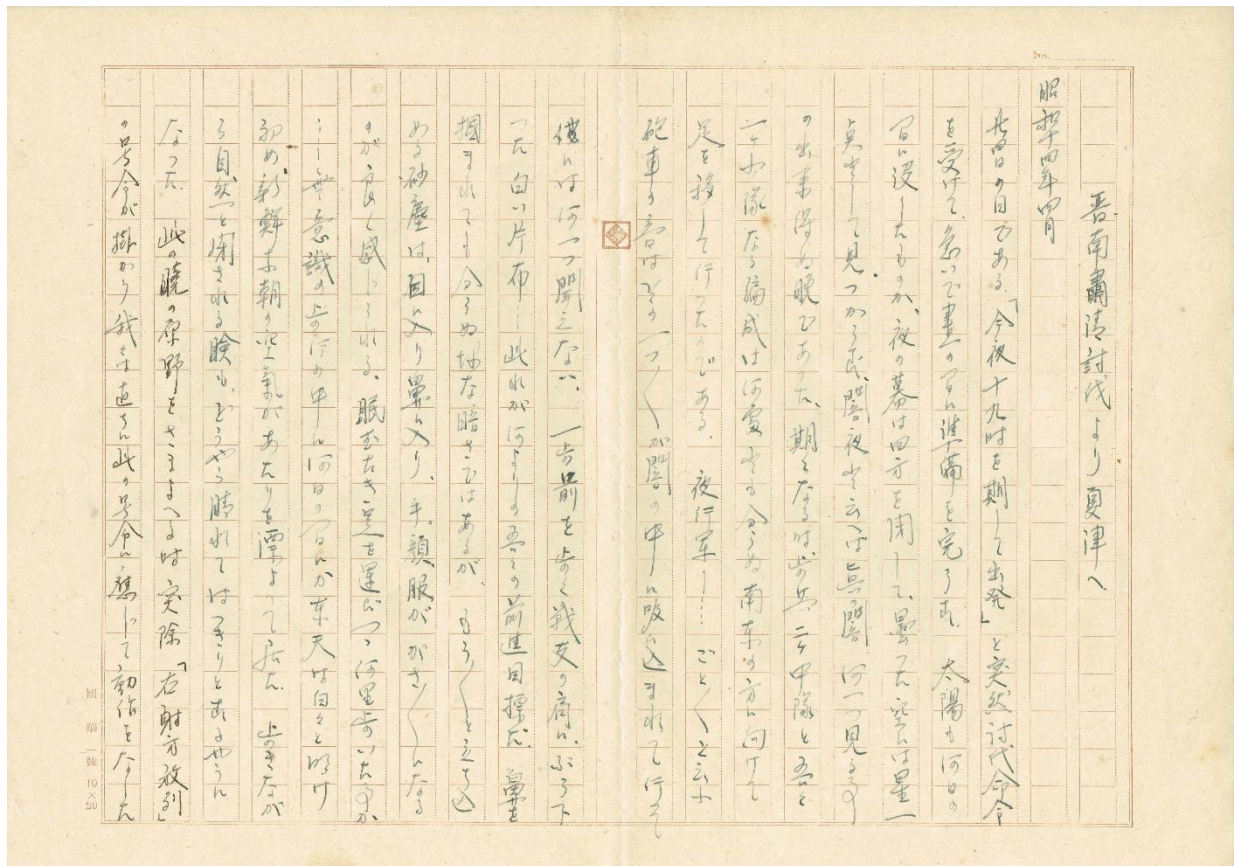
【1939年】3月上旬、自分の分隊に居た初年兵川崎君やら田中君が^{ぐきょう}虞郷^郷の方へ行き、虞郷に居た寺西君や平本君がこちらへ入れ替りする事となり、自分はそれの使役として、彼等を自動車で虞郷まで送り届けた。

その時には別れて久しく見なかった戦友高橋君やら其の他の者を見て、非常に懐かしい思ひがした。

虞郷も町は大きかったが、古い汚ない町で、大した事はなかった。

直ぐ又、寺西や平本の諸戦友を代りに乗せて^{りんしん}臨晋^処へ歸つて来たが、7・8里【≒30km】ある處をがたがたのトラックで往復するのは疲れるものだった。

かくして臨晋に於ける平和な時代も1日1日と暮れて行つた。



晋南肅清討伐より夏津へ

昭和 14 年【1939 年】4 月

24 日の日である。

「今夜 19 時を期して出発」と突然討伐命令を受けて、急いで晝^昼の間に準備を完了す。
太陽も何日の間に没したのか、夜の幕は四方を閉^{とぎ}して、曇った空は星一点として見つからず、
闇夜と云へば真闇^真、何一つ見る事の出来得ぬ晩であった。

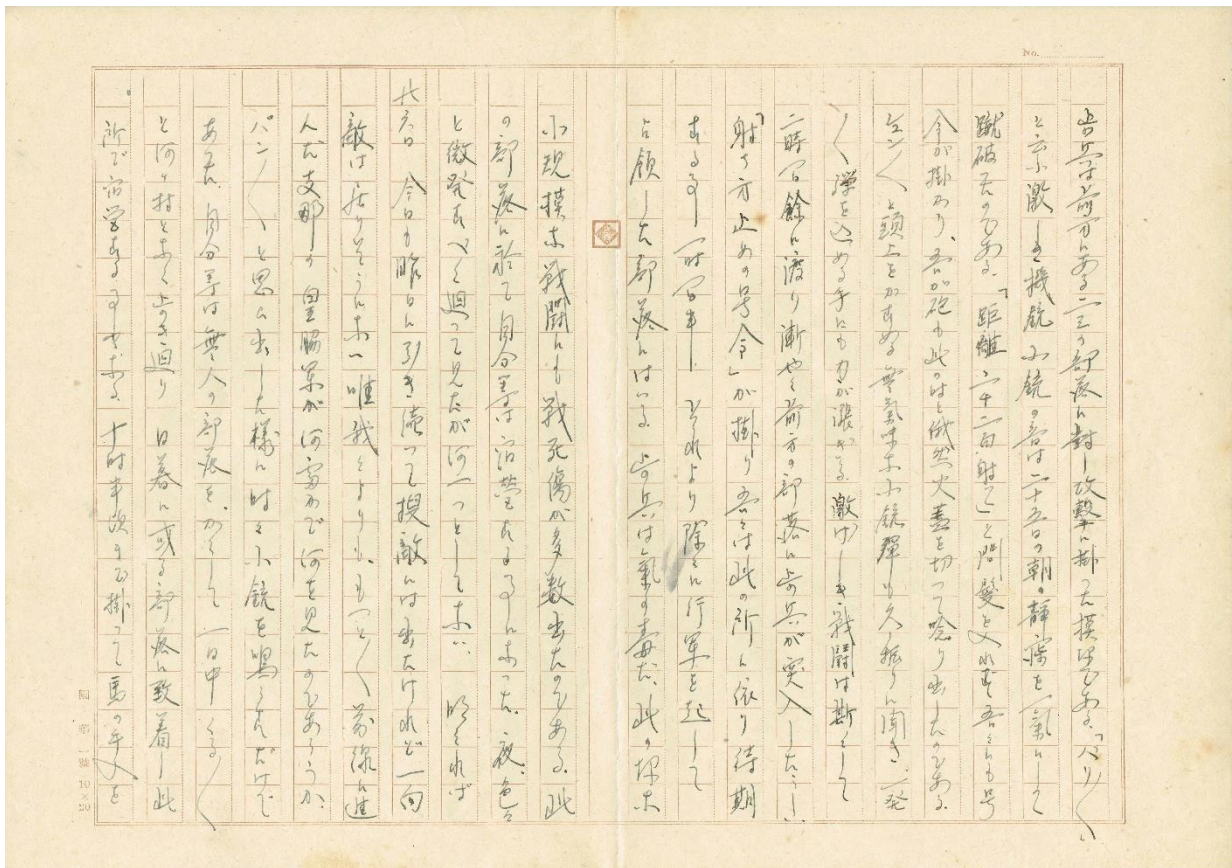
斯くなる時、歩兵 2 ケ中隊と吾々【砲兵】1 ケ小隊なる編成は、何處^処とも分らぬ南東の方に向けて足を移して行ったのである。

夜行軍…、ごとごとと云ふ砲車の音は、その一つ一つが闇の中に吸ひ込まれて行って、僕には何一つ聞えない。一步前を歩く戦友の肩にぶら下った白い片布…此れが何よりの吾々の前進目標だ。鼻を掴^掴まれても分らぬ様な暗さではあるが、もうもうと立ち込める砂塵は目に入り、鼻に入り、手、顔、服が、がさがさになるのが良く感じられる。

眠むたき足を運びつゝ、何里歩いた事か…、無意識の歩行の中に、何日の間か東天は白々と明け始め、新鮮な朝の空気があたりを漂よって居た。

歩きながら自然と閉される臉も、どうやら晴れてはつきりとするやうになった。

此の暁の原野をさまよへる時、突如「右射方放列」の号令が掛かり、我々は直ちに此の号令に應^応じて動作をなした。



歩兵は前方にある2・3の部落に^対し攻撃に掛った模様である。「パリパリ」と云ふ激しき機銃・小銃の音は【1939年4月】25日の朝の静寂を一^気にして蹴破ったのである。

「距離2千2百、射て」と間髪を入れず吾々にも号令が掛かり、吾が砲も此の時と、俄然火蓋を切^気って唸り出したのである。シュンシュンと頭上をかすめる無^気味な小銃弾も久し振りに聞き、1発1発、弾を込める手にも力が漲る。

激げしき戦闘は斯くして2時間^余餘りに渡り、漸^{よう}やく前方の部落に歩兵が突入したらしい。

「射ち方止め」の号令が掛り、吾々は此の所に依り待機する事1時間半、それより徐々に行軍を起して占領した部落にはいる。

歩兵は^気の毒だ。此の様な小規模な戦闘にも戦死傷が多数出たのである。

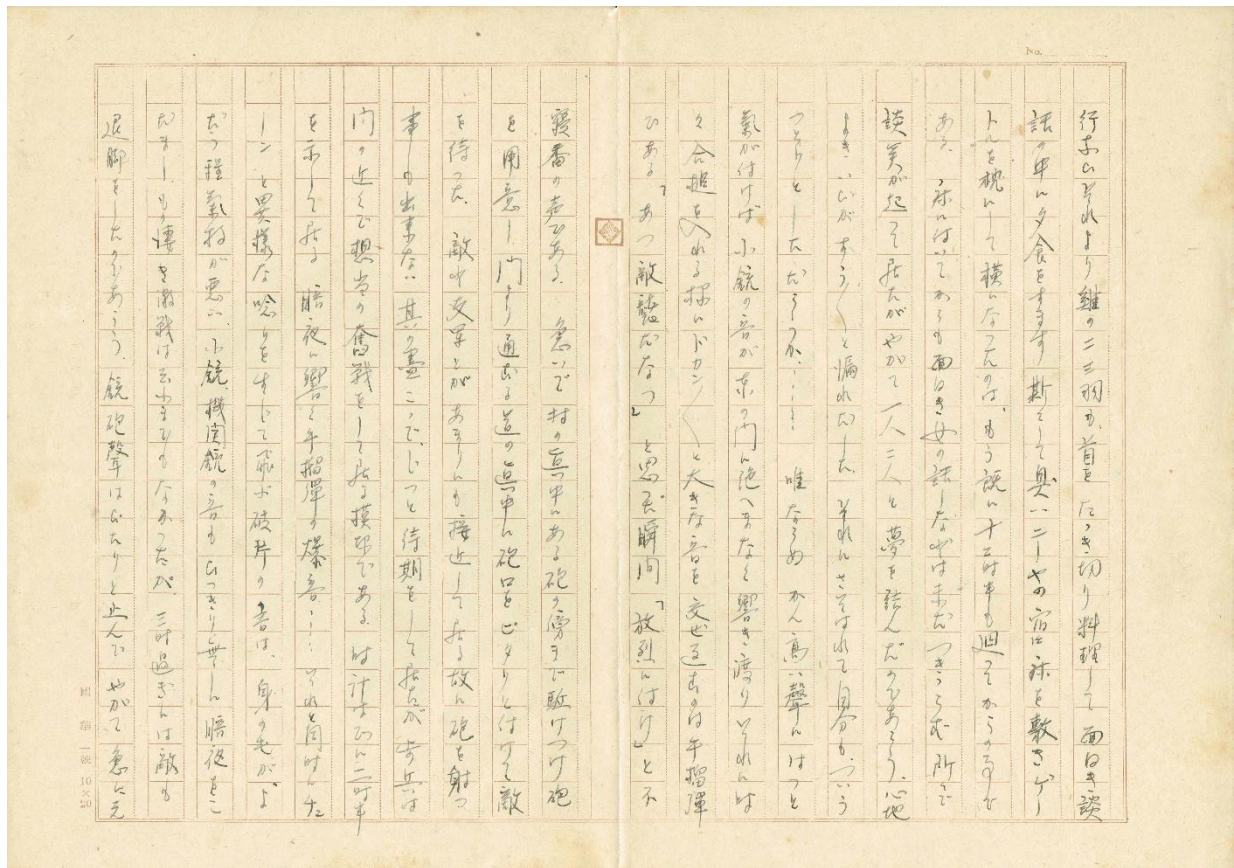
此の部落に於て自分等は宿^當營する事になった。

夜、色々と徴発すべく廻って見たが、何一つとしてない。明くれば

26日 今日も昨日に引き続いて搜敵には出たけれど、一向敵は居りそうにない。

唯、我々よりも、もつともつと前線に進んだ支那の皇協軍【「皇協軍」の誤り（日本軍に帰順・協力していた中国人部隊。「Cの日記」64頁参照）】が、何^処かで何を見たのであろうか、パンパンと思ひ出した様に時々小銃を鳴らすだけであった。

自分等は【村人が逃げ出して】無人の部落を、かくして1日中くるくると何ヶ村となく歩き廻り、日暮に或る部落に到着し、此所で宿營する事となる。10時半頃まで掛けて馬の手入を



行なひ、それより鶏の2・3羽も首をたゝき切り、料理して面白き談話の中に夕食をすます。

斯くして臭いニーヤの宿に床を敷き、ゲートルを枕にして横になったのは、もう既に12時半も廻ってからの事である。

床に付いてからも面白き女の話などは未だつきゝらず、所々で談笑が起って居たが、やがて1人2人と夢を結んだのであらう、心地よきいび【き】がすうすうと漏れだした。

それにさそはれて自分もついうつとりとしただらうか…。

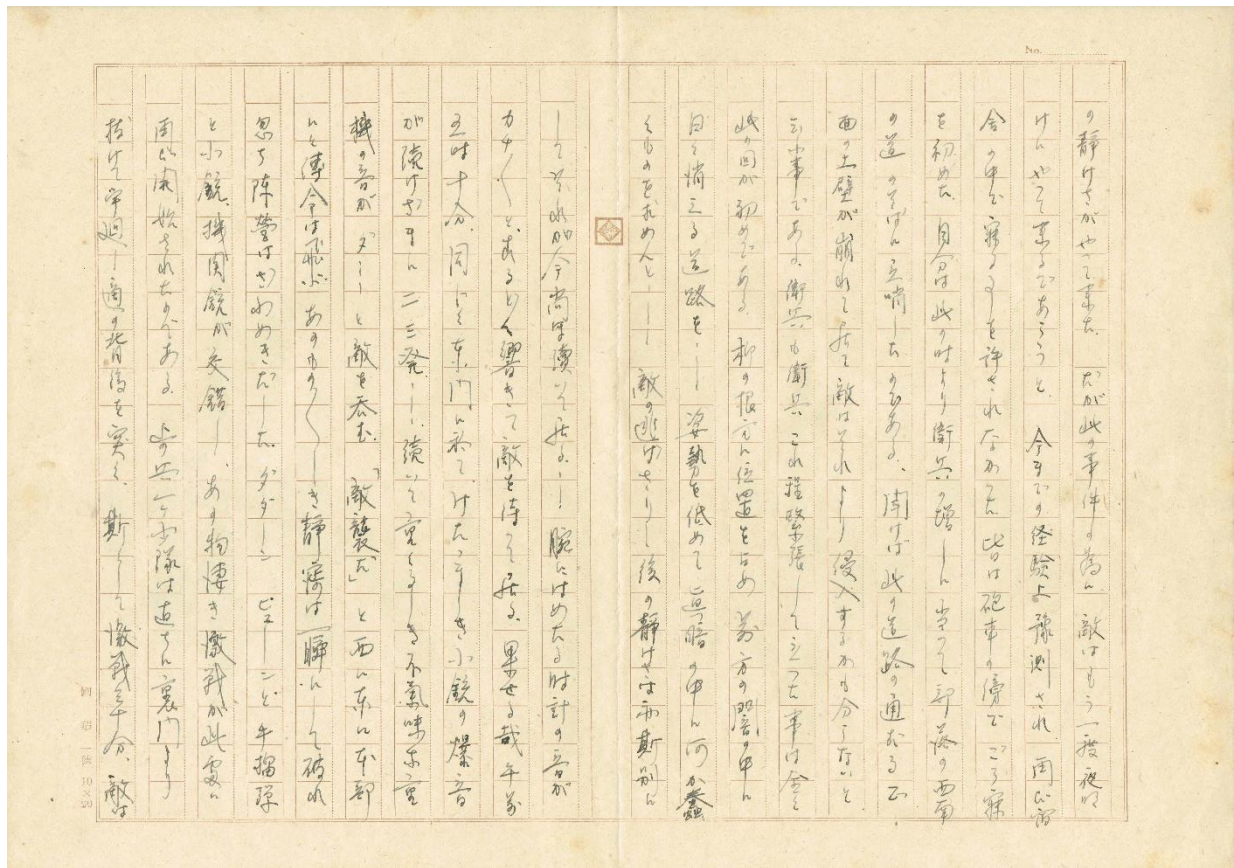
唯ならぬかん高い^{こえ}聲にはと^き気が付けば、小銃の音が東の門に絶へまなく響き渡り、それに時々相槌を入れる様にドカンドカンと大きな音を交ぜ返すのは手榴弾である。

「あつ敵襲だなつ」と思った瞬間、「放列に付け」と不寝番の声である。

急いで村の^真真中にある砲の傍まで駆けつけ、砲を用意し、門より通ずる道の^真真中に砲口をピタリと付けて敵を待った。敵と友軍とがあまりにも接近して居る故に、砲を射つ事も出来ない。

其の^{まま}儘、こゝでじっと待期をして居たが、歩兵は門の近くで相当の奮戦をして居る模様である。時計は正に2時半を示して居る。暗夜に響く手榴弾の爆音…、それと同時にチューンと異様な^き唸りを生じて飛ぶ破片の音は、身の毛がよだつ程、^き氣持が悪い。

小銃、機関銃の音もひっきり無しに暗夜をこだまし、もの凄き激戦は云ふまでもなかったが、3時過ぎには敵も退却をしたのであらう、銃^声砲聲はぴたりと止んで、やがて急に元



の静けさがやって来た。

だが此の事件の為に、敵はもう一度夜明けにやって来るであらうと、今までの経験上、^予豫測され、再び宿舎の中で寝る事を許されなかった。皆は砲車の傍でごろ寝を始めた。

自分は此の時より衛兵の増しに当って部落の西南の道のそばに立哨したのである。

聞けば此の道路の通ずる正面の土壁が崩れて居て、敵はそれより侵入するかも知れないと云ふ事である。

衛兵も衛兵、これ程緊張して立った事は全く此の回が初めてである。

柳の根方に位置を占め、前方の闇の中に〇々消える道路を…。

姿勢を低めて^真真暗の中に何か^{うごめ}蠢くものを求めんと…。

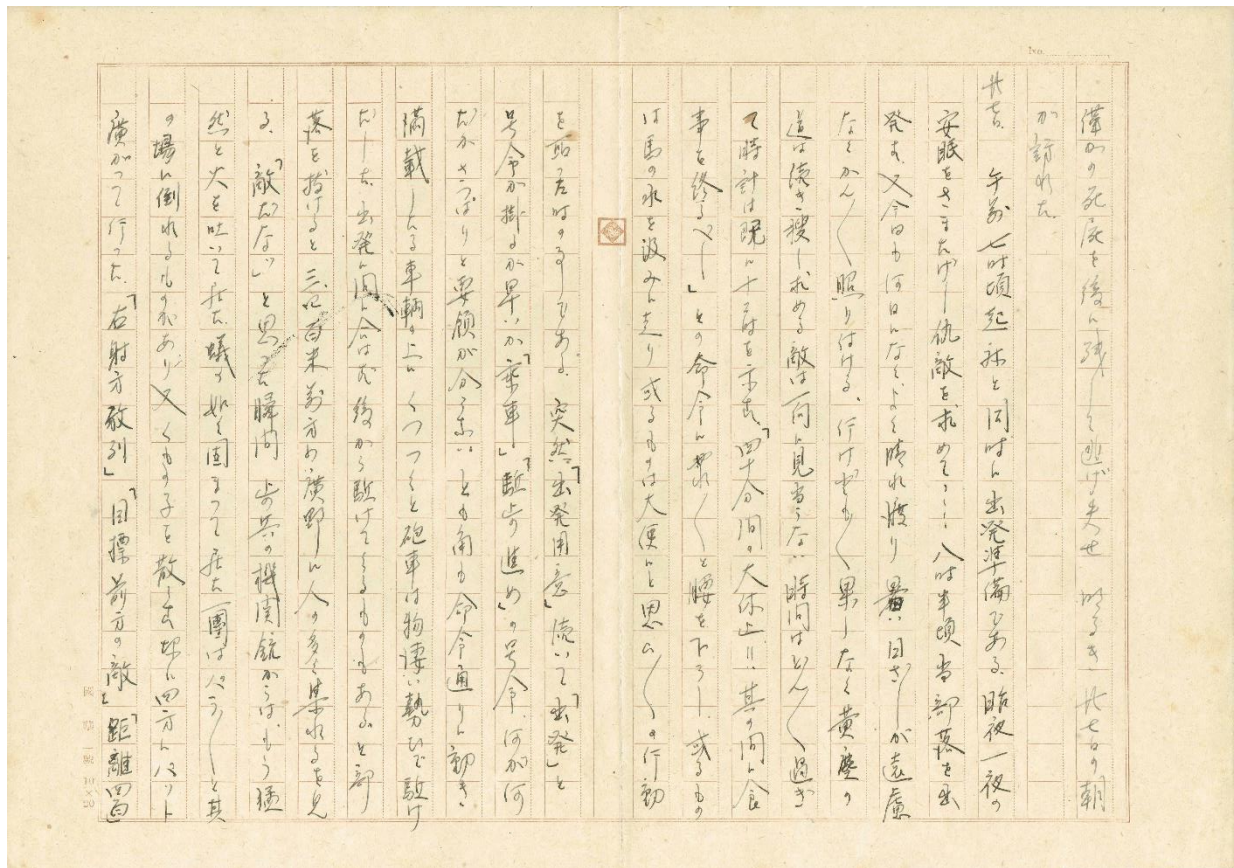
敵の逃げさりし後の静けさは亦格別にして、それが今尚ほ^続續いて居る…。

腕にはめたる時計の音がカチカチとするどく響きて敵を待つて居る。

果せる哉、午前5時10分、同じく東門に於て、けたゝましき小銃の爆音が続けざまに2・3発…、続いて重くるしき^気無気味な重機の音がダ…と敵を呑む。「敵襲だ」と西に東に本部にと^伝傳令は飛ぶ。あのものものしき静寂は一瞬にして破れ、忽ち陣^營營はざわめきだした。

ダダーン、ビューンと手榴弾と小銃、機関銃が交錯し、あの物凄き激戦が此處に再び開始されたのである。

歩兵1ヶ小隊は直ちに裏門より抜けて迂回し、敵の背後を突く。斯くして激戦30分、敵は



僅かの死^{しかばね}屍を後に残して逃げ失せ、明るき 27 日の朝が訪れた。

【1939 年 4 月】27 日 午前 7 時頃起床と同時に出発準備である、昨夜一夜の安眠をさまたげし^{きゅうてき}仇敵を求めて…。8 時半頃、当部落を出発す。

又今日も、何日になくよく晴れ渡り、暑い日ざしが遠慮なくかんかん照り付ける。

行けども行けども果しなく黄塵の道は続き、捜し求める敵は一向に見当らない。

時間はどんどん過ぎて、時計は既に 12 時を示す。

「40 分間の大休止!!其の間に食事を終るべし」との命令に、やれやれと腰を下ろし、或るものは馬の水を汲みに走り、或るものは大便にと、思ひ思ひの行動を取った時の事である、突然「出発用意」、続いて「出発」と号令が掛るが早いか、「乗車」、「駆歩進め」の号令、何が何だかさっぱりと要領が分らない。

とも角も命令通りに動き、満載したる車輛の上にくっつくと、砲車は物凄い勢ひで駆けだした。

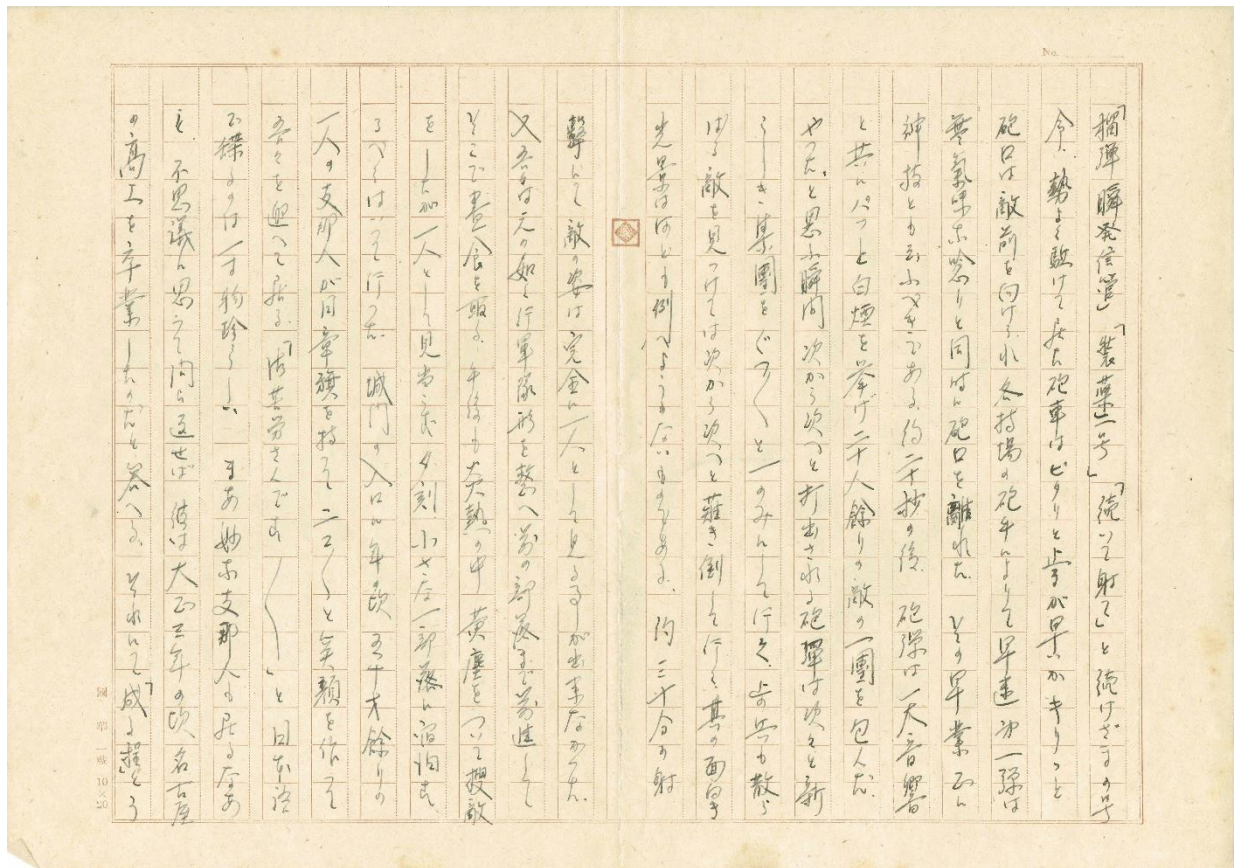
出発の間に合わず後から駆けてくるものもある。

と部落を抜けると 3・4 百米前方^mの廣^広野に人の多く集れるを見る。

「敵だなッ」と思った瞬間、歩兵の機関銃からは、もう猛然と火を吐いて居た。

蟻^団の如く固まって居た一團はパラパラと其の場に倒れるものがあり、又くもの子を散らす様に四方にパッと廣^広がって行った。

「右射方放列」、「目標前方の敵」、「距離 4 百」、



「榴弾瞬発信管」【着弾と同時に爆発し、破片が広範囲に飛散して損傷を与えるタイプの砲弾】、「装薬 2 号」、
「続いて射て」と続けざまの号令、勢よく駆けて居た砲車はピタリと止るが早いか、キリッと
砲口は敵前を向けられ、各持場の砲手によりて早速第 1 弾は無^気意味な唸りと同時に砲口を離れた。
その早業、正に神業とも云ふべきである。

約 20 秒の後、砲弾は一大音響と共にパッと白煙を挙げ、20 人餘りの敵の一^団を包んだ。
やった、と思ふ瞬間、次から次へと打出される砲弾は次々と新しき集^団をぐつぐつと一のみに
して行く。

歩兵も散らばる敵を見つけては、次から次へと薙ぎ倒して行く、其の面白き光景は、何とも例
へようもないものである。

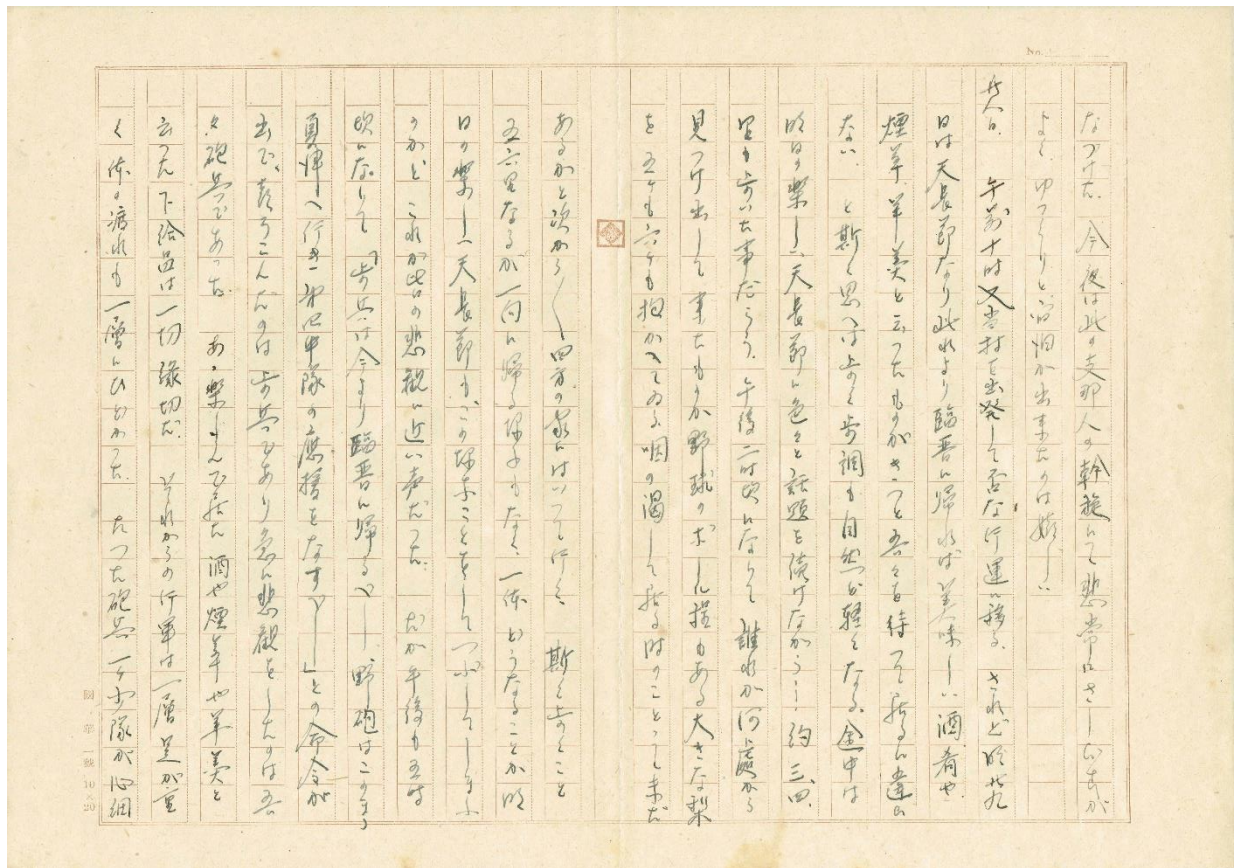
約 30 分の射撃にて、敵の姿は完全に一人として見る事が出来なかった。

又、吾々は元の如く行軍隊形を整へ、前の部落まで前進して、そこで晝^昼食を取る。

午後も炎熱の中、黄塵をついて搜敵をしたが、1 人として見当らず、夕刻小さな 1 部落に宿泊
するべく、はいって行った。

城門の入口に年の頃 50 才餘りの 1 人の支那人が日章旗を持ってニコニコと笑顔を作って吾々
を迎へて居る。「御苦労さんです、御苦労さんです」と日本語で喋るのは一寸物珍らしい。

まあ妙な支那人も居るなあと、不思議に思つて問ひ返せば、彼は^{ちよつと}大正 3 年の頃、名古屋の高工
を卒業したのだと答へる。それにて「成る程」とう



なづけた。

今夜は此の支那人の斡旋にて非常にさ一びすがよく、ゆっくりと宿泊が出来たのは嬉しい。

【1939年4月】28日 午前10時、又、当村を出発して否^{イヤ}な行軍に移る。

されど明29日は天長節【昭和天皇の誕生日^{りんしん}】なり。此れより臨^{りんしん}晋に帰れば美味しい酒、肴や、煙草、羊羹と云ったものが、きっと吾々を待つて居るに違ひないと、斯く思へば歩く歩調も自然と軽くなる。

途中は明日の^楽楽しい天長節に色々話題を続けながら…約3・4里【≒14km】も歩いた事だらう。

午後2時頃になりて誰れが何處^処から見つけ出して来たものか、野球のボール程もある大きな梨を5ヶも6ヶも抱かへてゐる。

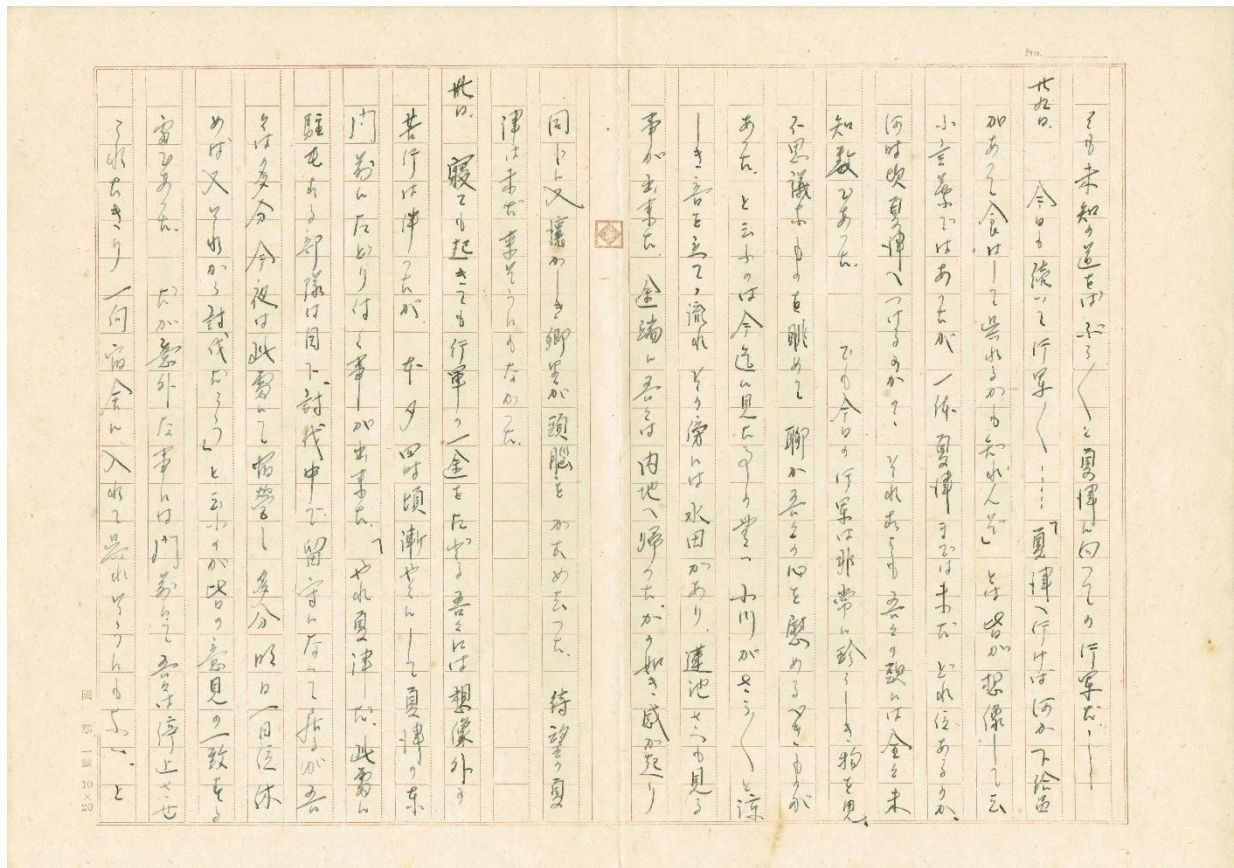
咽の渴して居る時のことゝて、未だあるかと、次から次から四方の家にはいって行く。

斯く歩くこと5・6里【≒22km】なるが、一向に帰る様子もなく、一体どうなることか、明日の^楽楽しい天長節も、この様なことをしてつぶしてしまふのかと、これが皆の悲観に近い声だった。

だが、午後も5時頃になりて「歩兵は今より臨^応晋に帰るべし。野砲はこのまま夏津へ行き、第四中隊の應援^応をなすべし」との命令が出で、款ろこんだのは歩兵であり、急に悲観をしたのは吾々砲兵であつた。

あゝ^楽楽しんで居た酒や煙草や羊羹と云った下給品は一切縁切だ。

それからの行軍は一層足が重く、体の疲れも一層にひどかった。たった砲兵1ヶ小隊が心細



くも未知の道をば、ぶらぶらと夏津に向っての行軍だ…。

【1939年4月】29日 今日も続いて行軍行軍…「夏津へ行けば何か下給品があつて、食はして呉れるかも知れんぞ」とは皆が想像して云ふ言葉ではあつたが、一体、夏津までは未だどれ位あるのか、何時頃、夏津へつけるのか？それすらも吾々の頭には全然未知数であつた。

でも今日の行軍は非常に珍らしき物を見、不思議なものを眺めて、^{いささ}聊か吾々の心を慰めるべきものがあつた。

と云ふのは、今迄に見た事の無い小川がさらさらと涼しき音を立てゝ流れ、その傍には水田があり、蓮池さへも見る事が出来た。

途端に吾々は内地へ歸ったかの如き感が起り、同じに又懐かしき郷里が頭脳をかすめ去つた。

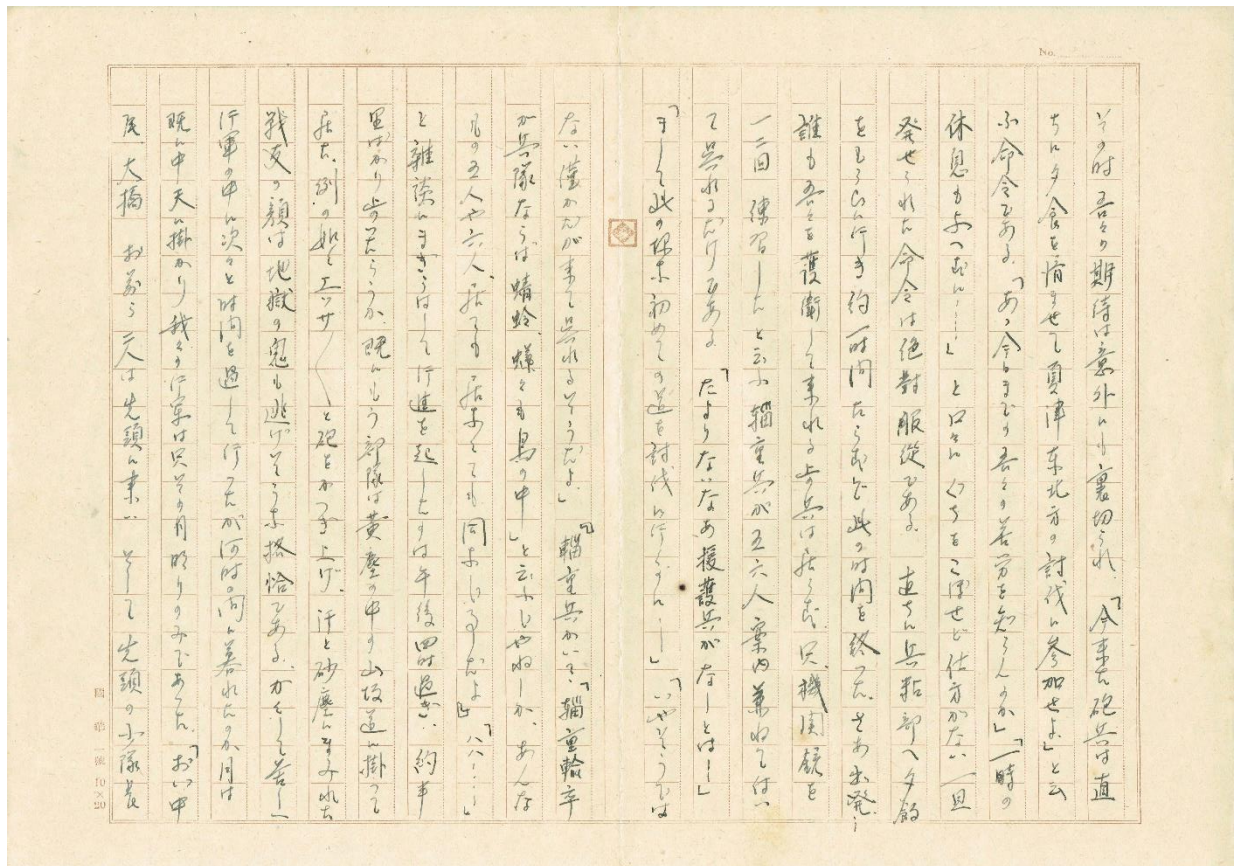
待望の夏津は未だ来そうにもなかつた。

【1939年4月】30日 寝ても起きてても行軍の一途をたどる吾々には、想像外の苦行は伴つたが、本夕4時頃、^{よう}漸やくにして夏津の東門前にたどり付く事が出来た。

「やれ夏津だ。此處^処に駐屯する部隊は目下、討伐中で、留守になつて居るが、吾々は多分今夜は此處^処にて宿營^營し、多分明日1日位休めば又それから討伐だろう」と云ふのが、皆の意見の一致する處^処であつた。

だが意外な事には門前にて吾々は停止させられたきり、一向宿舎に入れて呉れそうにもない。

と



その時、吾々の期待は以外にも裏切られ、「今来た砲兵は直ちに夕食を済ませて夏津東北方の討伐に参加せよ」と云ふ命令である。

「あゝ今日までの吾々の苦勞を知らんのか」、「一時の休息も与へずに…」と口々にぐちをこぼせど仕方がない。一旦、発せられた命令は絶対服従である。

直ちに兵^{へいたん}站部へ夕飯をもらひに行き、約1時間たらずで此の時間を終った。

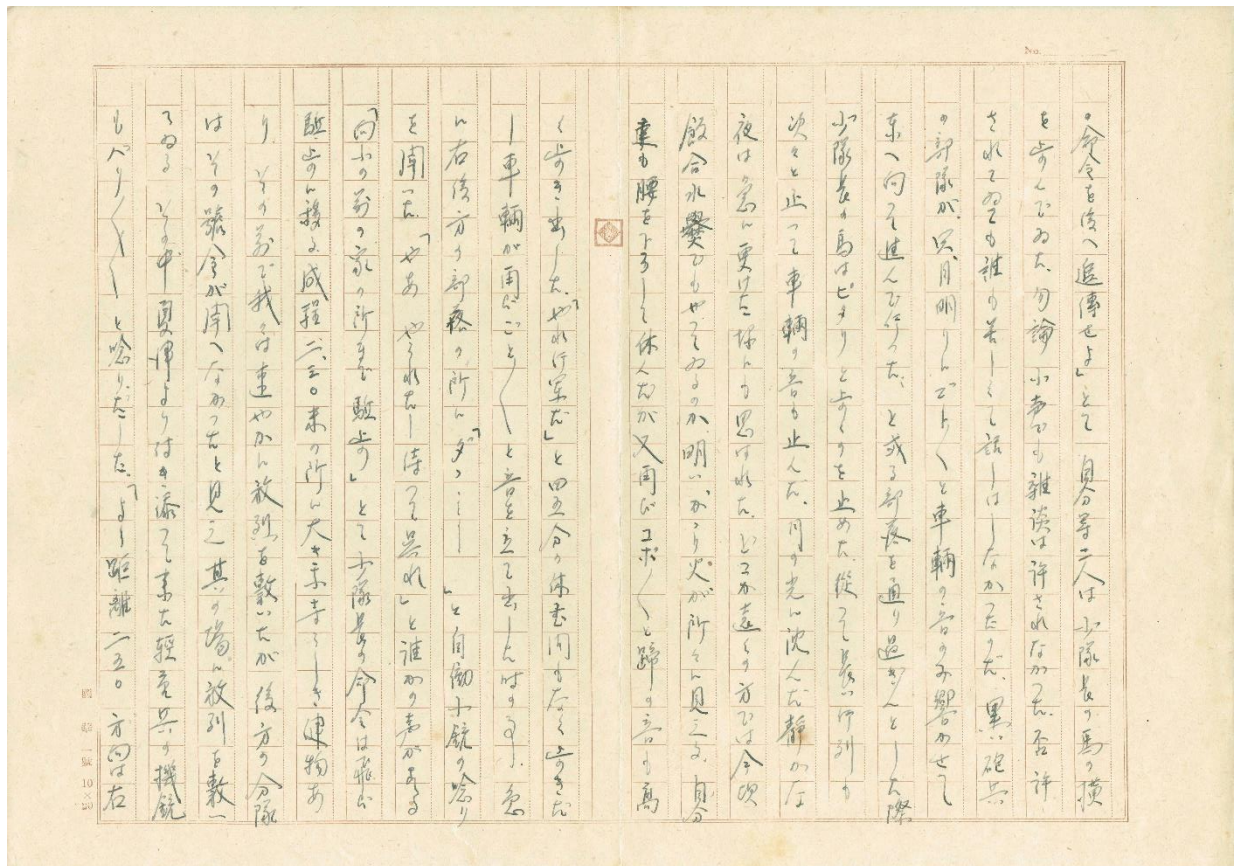
さあ、出発…、誰も吾々を護衛して来れる歩兵は居らず、只、機関銃を1・2回練習したと云ふ輜^{しちよう}重兵が5・6人、案内【を】兼ねて付いて呉れるだけである。

「たよりないなあ、援護兵がなしとは…」、「まして此の様な初めての道を討伐にいくのに…」、「いや、そうではない、僅かだが来て呉れるそうだよ」、「輜重兵かい？『輜重輪卒が兵隊ならば、蜻蛉、蝶々も鳥の中』と云ふじゃね一か、あんなもの5人や6人、居ても居なくても同じ事だよ」、「ハハ…」と雑談にまぎらはして行進を起こしたのは午後4時過ぎ、約半里【≒2km】ばかり歩いたらうか、既にもう部隊は黄塵の中の山坂道に掛って居た。

例の如く、エッサエッサと砲をかつぎ上げ、汗と砂塵にまみれた戦友の顔は、地獄の鬼も逃げそうな恰好である。

かくして苦しい行軍の中に次々と時間を過して行つたが、何時の間^{いつ}に暮れたのか、月は既に中天に掛かり、我々の行軍は只その月明りのみであつた。

「おい中尾、大橋、お前ら2人は先頭^{いっ}に來い、そして先頭の^{いっ}小隊長



の命令を後ろへ追^伝傳せよ」とて、自分等2人は小隊長の馬の横を歩^いんでゐた。

勿論小声でも雑談は許されなかった。

否、許されてゐても誰も苦しくて話しはしなかったのだ。

黒い砲兵の部隊が、只、月明かりにゴトゴトと車輻の音のみ響かせて東へ向って進んで行った。

と或る部落を通り過ぎんとした際、小隊長の馬はピタリと歩くのを止めた。

従^従って長い行列も次々と止って車輻の音も止んだ。月の光に沈んだ静かな夜は、急に更けた様にも思はれた。

どこか遠くの方では今頃、飯^{はん}盒^{ごう}炊^{すい}爨^{さん}でもやってゐるのか、明いかゞり火が所々に見える。

自分達も腰を下ろして休んだが、又再びコポコポと蹄の音も高く、歩き出した。

「やれ行軍だ」と4・5分の休む間もなく歩きだし、車輻が再びごとごとと音を立て出した時の事、急に右後方の部落の所に「ダゝ…」と自動小銃の唸りを聞いた。

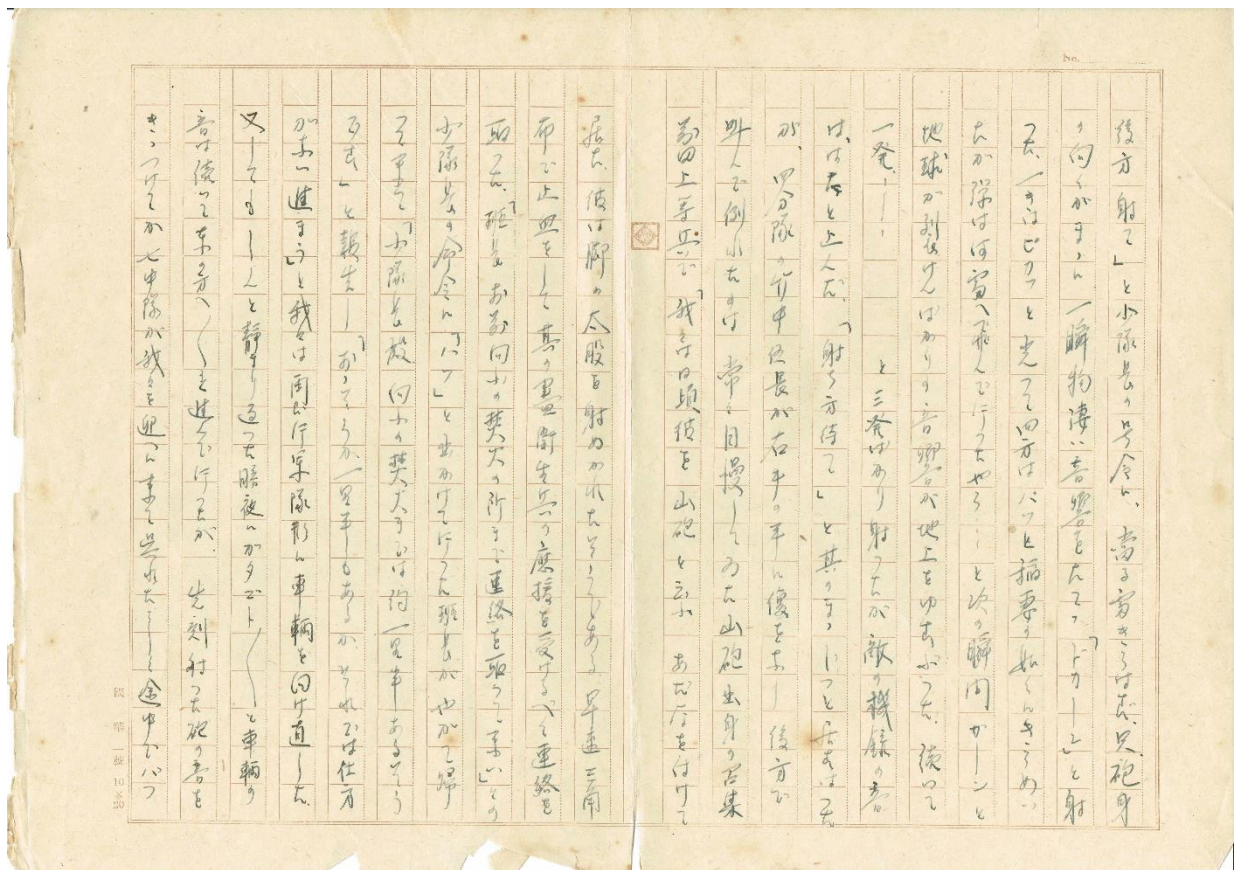
「やあ、やられた一、待って呉れ」と誰かの声がする。

「向^向ふの處の家の所まで駆歩」とて小隊長の命令は飛び、駆歩に移る。

成程、2・30^m米の所に大きな寺らしき建物【が】あり、その前で我々は速やかに放列を敷いたが、後方の分隊はその號^号令が聞へなかったと見え、其の場に放列を敷いてゐる。

その中、夏津^{しちよう}より付き添って来た輻^輻重兵の機銃もバリバリバリと唸りだした。

「よし、距離250、砲口は右



後方、撃て」と小隊長の号令に、^当當^処處きらはず、只、砲身の向くがままに、一瞬、物凄い音響をたて、「ドカーン」と射った。一きはピカッと光って四方はパッと稲妻の如くにきらめいたが、弾は何處^処へ飛んで行ったやら…。

と、次の瞬間、ガーンと地球が裂けんばかりの音響が地上をゆすぶった。

続いて一発…、と、三発ばかり射ったが敵の機銃の音は、はたと止んだ。

「射ち方待て」と其のまゝじっと居すはったが、四分隊の竹中伍長が右手の手に傷をなし、後方で叫んで倒れたのは、常々自慢^いしてゐた山砲出身の召集【兵の】前田上等兵で、我々は日頃彼を「山砲」と云ふあだなを付けて居た。彼は脚の太股を射ぬかれたそうである。

早速三角布で止血^まをして、其の儘^ま、衛生兵の應援^応を受けるべく、連絡を取った。

「班長、お前、向ふの焚火の所まで連絡を取って来い」との小隊長の命令に「ハッ」と出かけて行った班長が、やがて帰って来て「小隊長殿、向ふの焚火までは約1里半【≒6km】あるそうです」と報告し、「おゝそうか、1里半もあるか、それでは仕方がない、進もう」と我々は再び行軍隊形に車輛を向け直した。

又してもしんと静まり返った暗夜に、ガタゴトガタゴトと車輛の音は続いて東の方へ、東の方へと進んで行ったが、先刻射った砲の音をきゝつけてか、七中隊が我々を迎へに来て呉れたらしく、途中でバフ

【「思ひ出略記」のこの後の部分は失われている】

(参考)「思い出略記」が途切れた1939年5月以降、1940年初頭に復員・帰国するまでの足取り

1. 1939年5月以降、除隊までの兵籍簿の記述

【履歴】 昭和14年5月26日より6月27日 第二期肅清戦ニ参加
昭和14年6月28日より8月25日迄 ^{しんとう}晋東作戦ニ参加
昭和14年8月26日より12月19日迄 ^{ろあん}潞安平地肅清戦ニ参加
昭和14年11月7日 復員下令(※右記命令)
昭和14年12月20日 ^{ちょうち}山西省長治縣潞安出發
昭和14年12月31日 ^国満支國境通過
昭和15年1月2日 ^国朝鮮國境通過
昭和15年1月2日 龍山着

昭和15年1月8日 服役延期中の處除隊

同日 ^予豫備役編入

【服役區分】 ^予豫備役：昭和15年1月8日

備考： 昭和12年9月28日陸軍省令第41號ニ依、

昭和13年10月31日より昭和15年1月7日まで現役延期

【官等級】 昭和14. 6. 1 砲兵上等兵

昭和15. 9. 15 陸軍上等兵(勅令第581號^号ニ依ル)

【特業及特有の技能】 昭和14年10月10日 観測手

2. 第20師団の経過 [\[防衛省戦史叢書第89巻「支那事变陸軍作戦<2>」](#) 408～433頁(画像217～229枚目)等による]

・北支那方面軍は、昭和13年12月2日の大陸命第241号(思1頁を参照)に従い、昭和14年1月～5月、6月～9月、10月～15年3月の3期に分けて占領地域の治安肅清作戦と治安維持工作に取り組んでいた。

・日中戦争の拡大に伴い、日本は続々と師団を増設して中国大陆に送ったが、そのうち新設第32・36・37師団が4～5月にかけて北支に到着し、既存の第20・109・114師団の作戦地域を継承した。

これ以降、これら既存師団が帰還するまでの間、一時的に兵力が増えるのを利用して、第一軍は山西省内の残敵掃蕩に取り組んだ。

・第20師団の場合、前年7月以降、^{うんじょう}運城平地の守備を担当していたが、日本軍の占領地域の最前線だったので、慎重を期して6月4日と19日の2段階に分けて守備地域を第37師団に引継ぎ(思22頁参照)、それ以降は、第2期肅清計画(のうち東南部山西作戦)、^{しんとう}晋東作戦(^{えんきよく}垣曲方面)、^{ろあん}潞安平地肅清戦などに従事した。

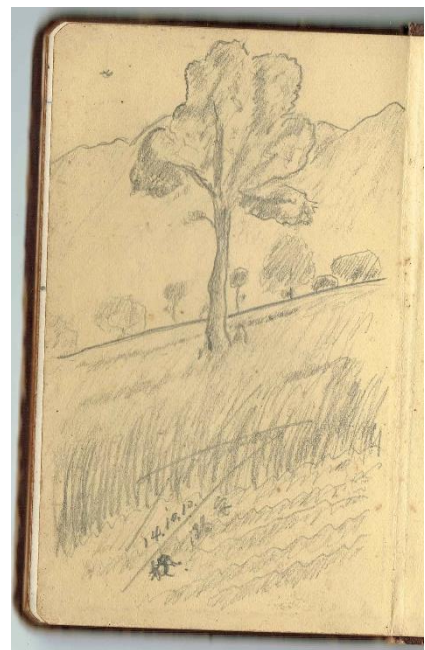
・中尾敏郎らの野砲兵第26連隊も、さっそく6月4日から陌南鎮・平陸附近での討伐を行った(思23頁を参照)。

その後の足取りについては、「日中戦争の随想」の「46. ニンニク」の項(随17頁)で「昭和14年6月以降の垣曲及び潞安作戦」と記述されているほか、次頁のメモが残っているので、垣曲や潞安など

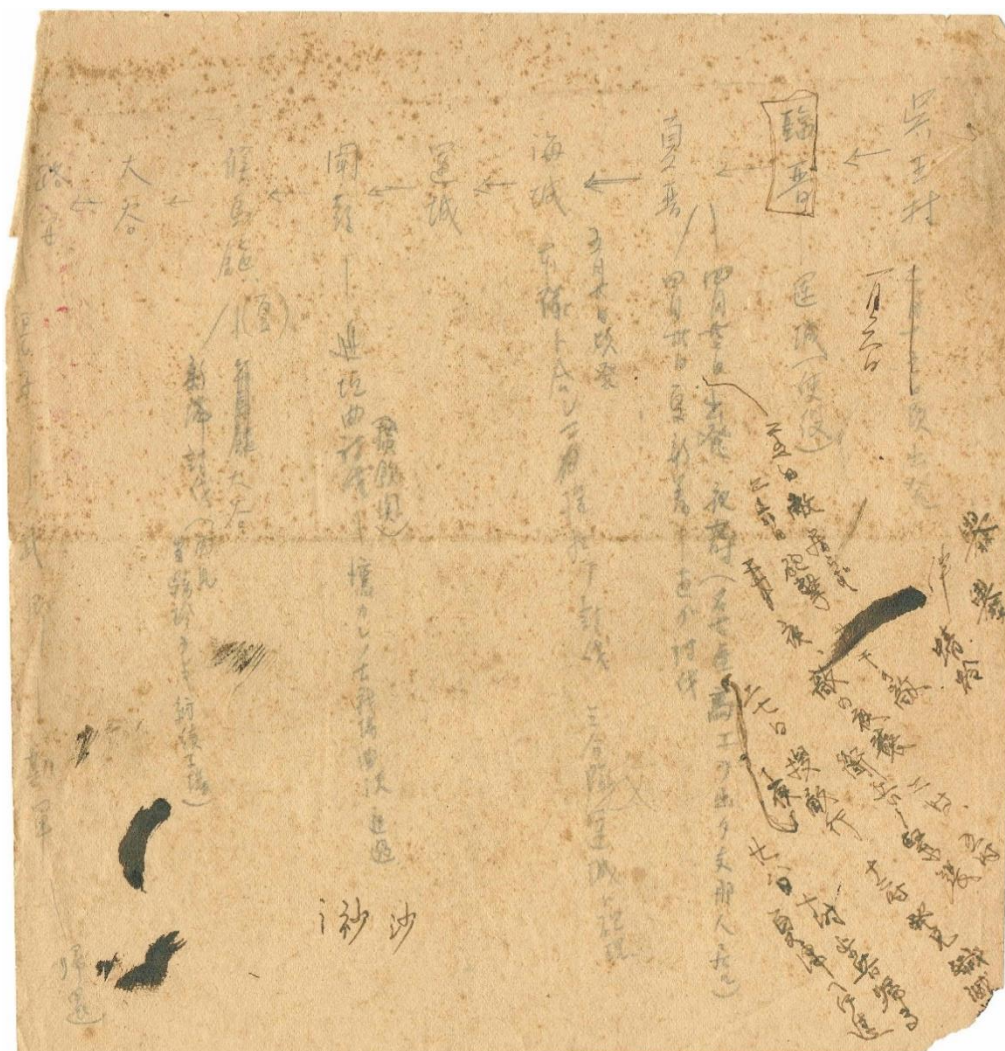
での討伐戦に参加後、上記兵歴簿に記載のように1939年12月20日以降、帰還の途についたと推測される。

^号大陸命第385號 命 令
1. 第20、第108師^団ヲ第1軍戦闘序
列ヨリ、第101、第106師^団ヲ第11
軍戦闘序列ヨリ除キ、内地又ハ朝鮮
ニ^帰還セシム。(第2項以下省略)
昭和14年11月7日
^伝奉勅傳宣 ^総参謀總長 ^{ことひと}載仁親王
[[アジア歴史資料センターC14060919600大](#)
[陸命\(防衛省\)](#)画像23枚目]

昭和14. 10. 12 潞安のスケッチ



(参考)「思い出略記」が途切れた1939年5月以降、1940年初頭に復員・帰国するまでの足取りのメモ



呉王村 (※1939年) 1月6日頃出発
 ↓
 臨晋 ---- うんじょう 運城 (使役)
 ↓ ---- 4月20日頃 出発 夜九時 (名古屋高工ヲ出タ支那人居ル)
 25日敵居らず
 26日砲撃 ○千の敵 夜、敵の夜襲 2時 5時 衛兵の緊張
 27日捜敵行 12時 発見 殲滅
 28日10時歩兵帰る 夏津へ行進
 夏晋 ---- 4月30日 夏○着----直グ討伐
 ↓ 5月30日頃発
 海城 本隊ト合シ二〇程〇〇討伐 三分隊運城に砲○
 ↓
 運城 (横鎮関)
 ぶんき えんきよく きよくよく
 聞喜 ---- ○垣曲 討伐 懐カシノ古戦場 曲沃 通過
 ↓ (夏)
 こうばちん しんこう
 候馬鎮 ---- 新絳 討伐 (西瓜 ○縣珍ラシキ紡績工場)
 ↓
 たいこく
 大谷
 ↓
 ろあん ちょうし ぶごう
 潞安 → 長子 → 武郷 → 勤單 → 帰還

(参考) 1939年6月21～23日の垣曲作戦における関部隊(第39旅団)のルートか?
[\[アジア歴史資料センターC11111621200 情報記録綴\(防衛省\) 画像 11 枚目\]](#)

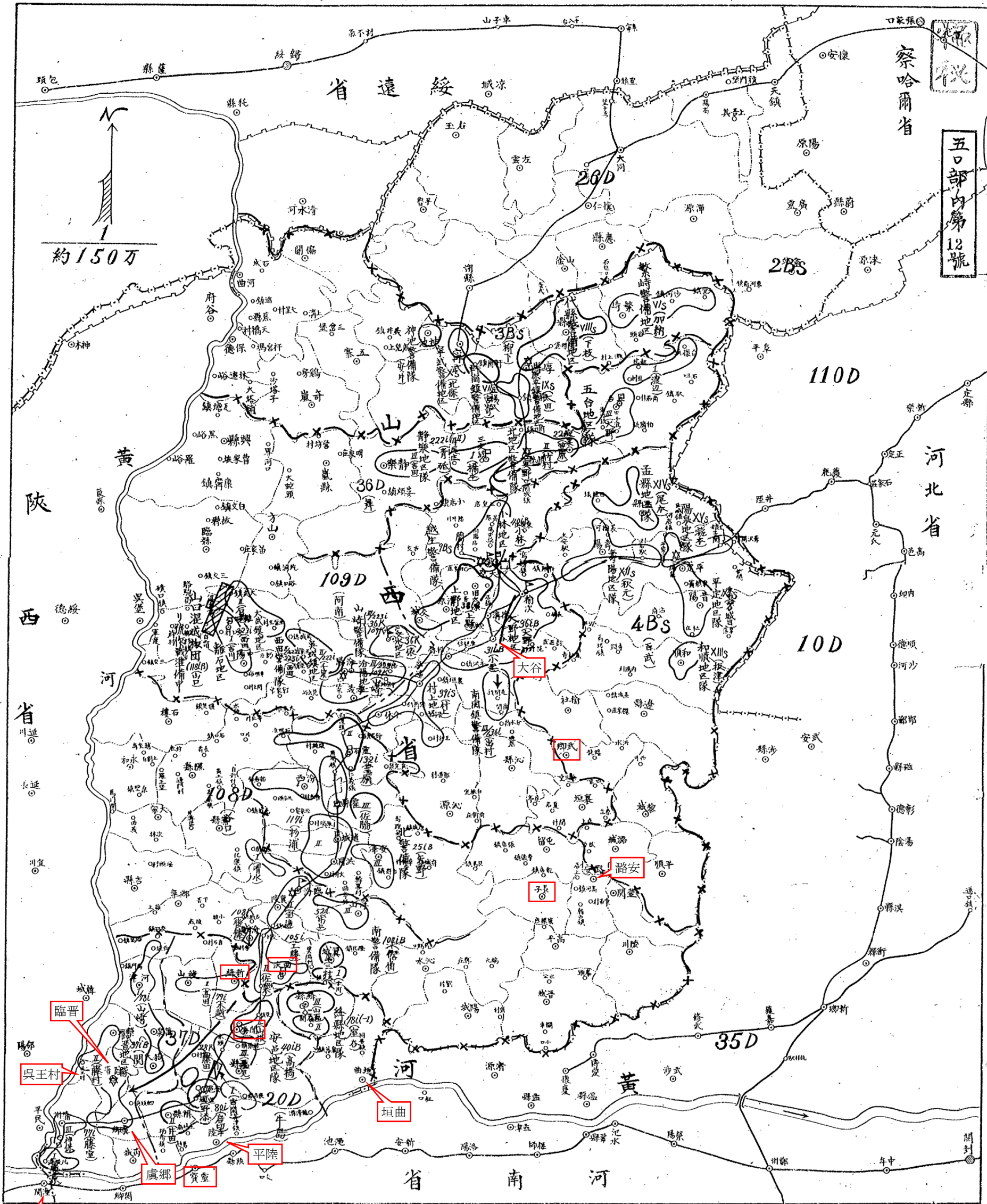
(参考) 前頁のスケッチの日付から、10月7～10日の潞安周辺掃滅戦に参加した
[\[アジア歴史資料センターC11110442100、支那事変に於ける主要作戦の梗概\(防衛省\)\]](#)

- (参考) 第一軍命令 5月27日10時 太原軍司令部 [アジア歴史資料センターC11110981700 第1軍機密作戦日誌(防衛省) 画像56～59枚目]
1. 第37師團ノ輸送ハ、概ネ順調ニ進捗シアリ。
 2. 軍ハ第20師團ト第37師團トノ防衛任務ノ交代ヲ實施セントス。右交代ハ現第20師團作戰地域ヲ東西ノ2地區ニ区分シテ實施ス。(中略)
 3. 第20師團ハ、先ヅ西地區、次デ東地區ノ防衛任務ヲ第37師團ニ移譲スル(中略)。
 4. 第37師團ハ、第20師團ヨリ先ヅ西地區、次デ東地區ノ防衛任務ヲ繼承シ、爾後其ノ地區内ノ肅正ニ任ズルト共ニ、黄河ノ線ヲ警戒スベシ。(中略)
 5. 第3、第4項ニ示ス西地區防衛任務交代ノ時機ハ6月4日12時、東地區防衛任務交代ノ時機ハ6月19日12時トス。 第一軍司令官 梅津中将

1939年5月下旬の態勢図…中尾敏郎の居た臨 晋は西地区なので、6月4日には交代完了した [アジア歴史資料センターC11110981800 第1軍機密作戦日誌(防衛省) 画像61～62枚目]

2297
2298

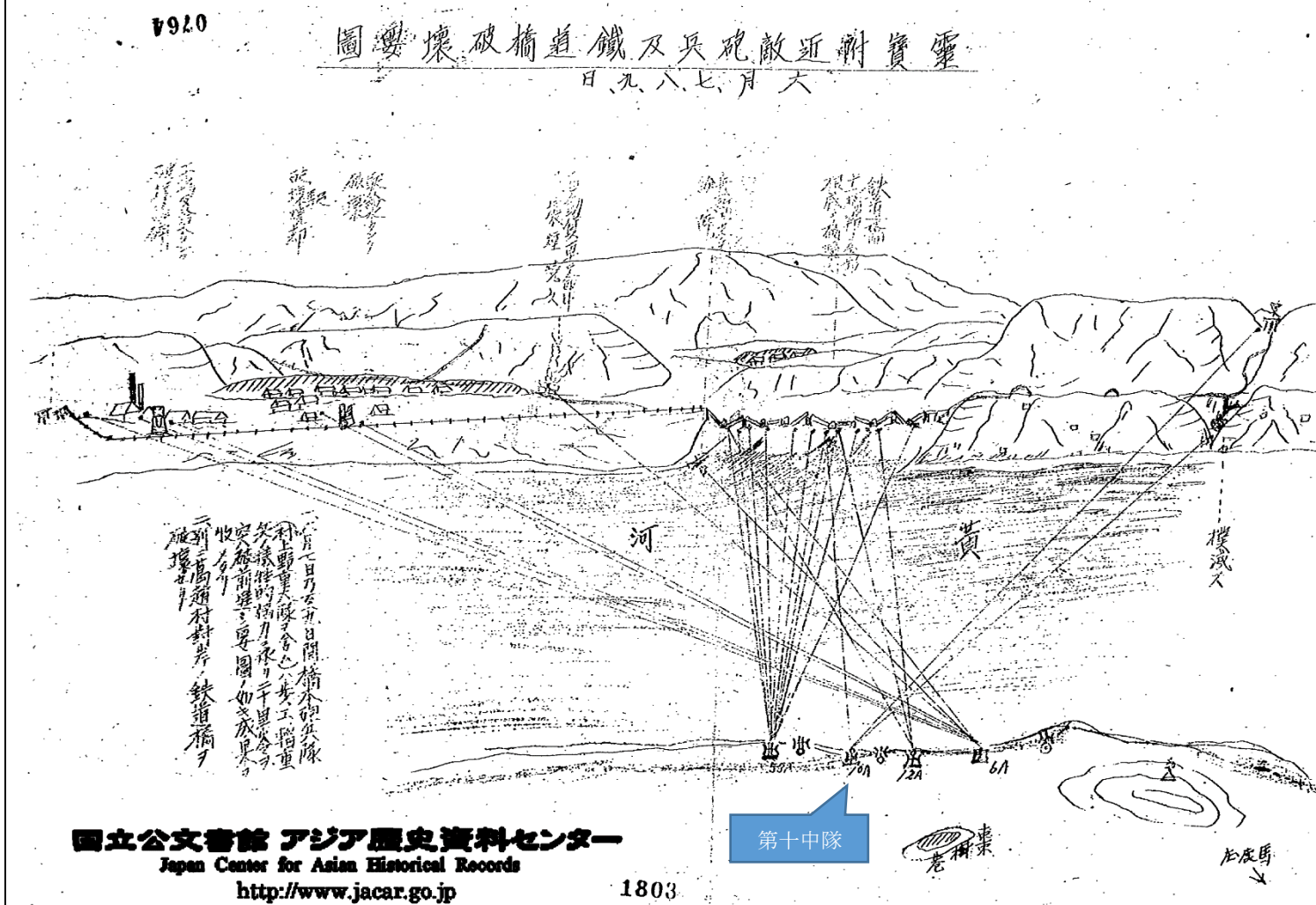
五月下旬に於ける第一軍態勢要圖



第一軍部調製 昭和十四年五月一日

(参考) 陌南鎮・平^{へいりく}陸附近殲滅戦 (1939 年 6 月 4 日～10 日)
靈^{れいほう}寶^{ほう}付近は切り立った黄河の崖になっており、華北を東西に分かつ要衝 (古代の函谷関) である。日本軍はその北側を占領していたが、南側の中国側の崖に沿って隴^{ろうかい}海^{かい}鉄道線が走っており、西^{せいあん}安^{あん}以西に通じる中国軍の重要な輸送ルートになっていた。

野砲兵第 26 連隊 (橋本兵团) は、この黄河対岸の靈寶鉄道橋を砲撃、破壊する作戦を行ったが、中尾敏郎の第十中隊も参加している。同連隊の戦闘詳報によれば、6 月 7 日「9 時 30 分射撃ヲ開始セシム。準備ノ完備セルト、至近距離 (2 千米) ナルト、敵火ノ妨害ニ對スル機先ヲ制スル射撃ニ依リ、敵ノ妨害尠ナカリシトニ依リ、精度極メテ良好ニシテ、命中彈續出シテ、12 時 42 分十五榴中隊先ヅ試射ヲ加へ、射彈 114 (内命中彈 47) ヲ以テ第 4 橋脚頭ヲ破壊シ、第 4 橋節ヲ完全ニ擊墜ス。次テ十榴第十中隊ハ、函谷關^{函谷關台}臺上ニ現レタル敵ノ山砲及迫撃砲ヲ制圧スル^{かたわ}傍^わラ、13 時 20 分、第 6 橋節ヲ完全ニ擊墜セリ…」とある。[[アジア歴史資料センターC11111387700 野砲兵第 26 連隊陌南鎮及平陸附近殲滅戦々闘詳報 \(防衛省\)](#) 画像 26 枚目 (簿冊は C11111387500)] なお、この戦闘に参加した部隊の内訳は次頁のとおり。



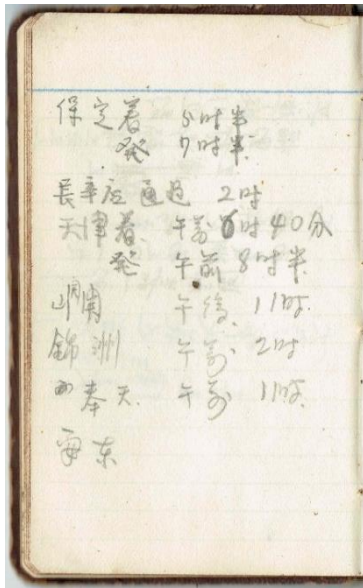
なお、この砲撃に先立つ 5 月 6 日から 22 日にかけて、野砲兵第 26 連隊は靈寶^{どうかん}の西の潼^{とう}関^{かん}附近において、隴海鉄道線を走る列車を対岸から直接砲撃するとともに、中国軍の 15 センチ級重砲部隊との間で、黄河を挟んだ砲撃戦の「決闘」をしており、周到な事前準備をしていた日本側が勝利して中国軍側の野砲をほとんど破壊したとされている。この戦闘も戦闘詳報が残っていて大変興味深いのが、参加部隊の中で「第四大隊 (10・11 欠) …」と記載されており、中尾敏郎の第 10 中隊は参加していなかったようである。

[[アジア歴史資料センターC11111388500 野砲兵第 26 連隊 潼関砲撃戦戦闘詳報 \(防衛省\)](#) 画像 4 枚目 (簿冊は C11111388300)] [[アジア歴史資料センターC11111388700 野砲兵第 26 連隊 函谷關砲撃戦戦闘詳報 \(防衛省\)](#) 画像 26 枚目 (簿冊は C11111387500)]



(参考) 陌南鎮・平陸附近殲滅戦 (1939 年 6 月 4 日～10 日) の参加部隊 [「アジア歴史資料センターC11111388100、野砲兵第 26 連隊陌南鎮及平陸附近殲滅戦々聞詳報\(防衛省\)」](#)

[illegible]



【手帳に残っている復員時の行程メモ】

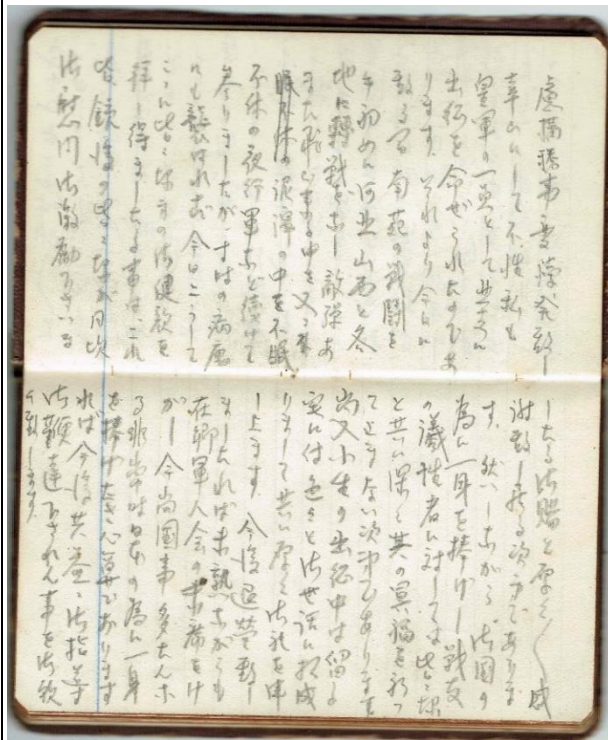
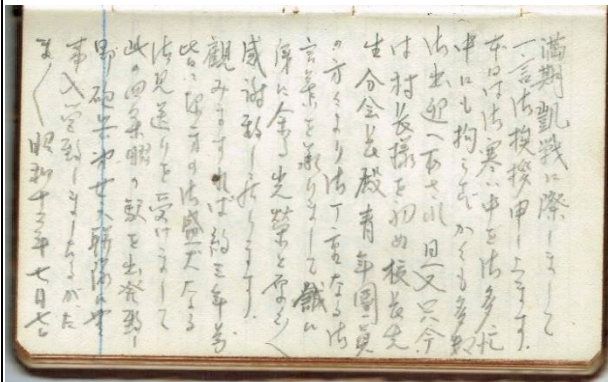
ほてい 保定 着 【1939年12月30日】5時半
 発 7時半
 長辛店 通過 【12月31日】2時
 てんしん 天津 着 午前6時40分
 発 午前8時半
 さんかいかん 山海関【満支国境】 午後11時
 きんしゅう 錦洲 【1940年1月1日】午前2時
 ほうてん 奉天 【1月2日】午前1時
 あんとう 安東

※ 師団長を含む第20師団の先頭は12月31日朝に京城に到着したようで、「凱旋七田部隊ノ出迎ヲ終了セリ。部隊長以下、官民歓迎裡ニ志氣旺盛、帰著セラル」との報告電報が残っている。

〔[アジア歴史資料センター](#)
 C04121728400、陸支密大日記(防衛省)〕

【朝鮮国境。Aの日記の末尾の貯金通帳で、1月5日と8日に京城で貯金を払い出したようなので、一旦、朝鮮龍山の第20師団営舎に戻ってから輸送船で郷里大阪の四條畷に帰ったのであろう】

【手帳に残っている復員挨拶の原稿】



満期凱旋に際しまして一言御挨拶申し上げます。

本日は御寒い中を御多忙中にも拘らず、かくも多数御出迎へ下され、且又只今は村長様を初め校長先生、分會長殿、青年團員の方々より御丁寧なる御言葉を承りまして誠に身に余る光榮と厚く厚く感謝致し居ります。顧みますれば約三年前、皆々様方の御盛大なる御見送りを受けまして、此の四條畷の駅を出発致し、野砲兵第二十連廿六聯隊に無事入営致しましたが、たまたま昭和十二年七月七日、盧溝橋事変勃発致し、幸ひにして、不肖私も皇軍の一員として北支に出征を命ぜられたのであります。

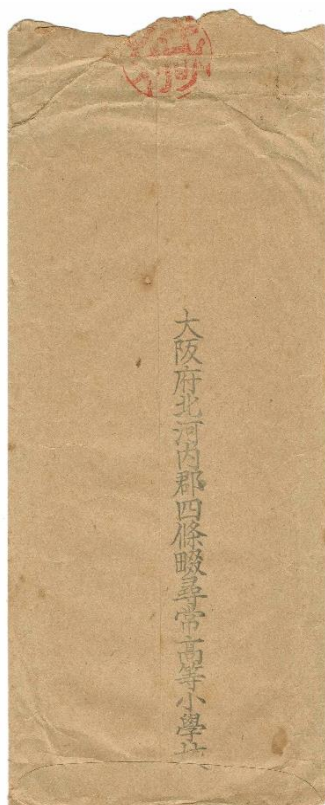
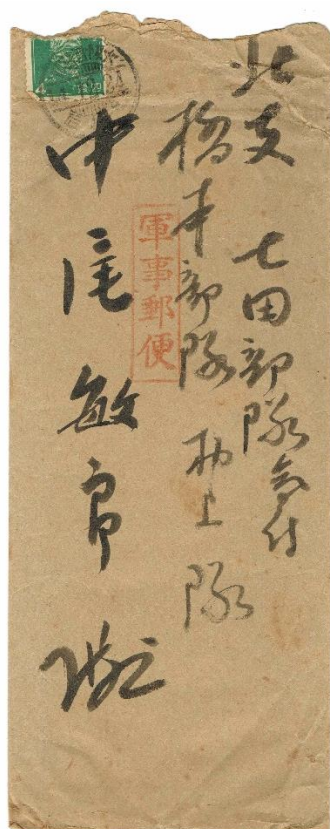
それより今日に至る間、南苑の戦闘を手始めに河北・山西と各地に轉戦をなし、敵弾あまた飛び来る中を、又でいねい泥濘の中を、不眠不休の夜行軍など續けて参りましたが、寸時の病魔にも襲われず、今日こうしてここに皆々様方の御健顔を拝し得ました事は、これ皆、銃後の皆々様が日頃御慰問御激励下さいました御賜と厚く厚く感謝致し居る次第であります。

然しながら、御国の為に一身を捧げし戦友の犠牲者に対しては、皆々様と共に深く其の冥福を祈って止まない次第であります。

尚又、小生の出征中は留守宅には色々と御世話に相成りまして、共に厚く御礼を申し上げます。

今後、退營致しましたれば、未熟ながらも在郷軍人会の末席をけがし、今尚国事多難なる非常時、日本の為に一身を捧げたき心算でおりますれば、今後共、益々御指導御鞭撻下されん事を御願ひ致します。

(参考) 昭和 14 年 12 月 24 日付の消印があるので、復員途中で受け取ったと思われる、出身校からの年賀状



[illegible]

(参考) 兵籍簿の記述

【勲等功級】 昭和 15. 4. 29 (1310432) 旭八等

【賞典】 昭和 15 年 4 月 29 日 支那事變從軍記章授與

はくしょくとうようしょう
勲八等 白色桐葉章



支那事變從軍記章



(参考：その後の第20師団について)

第20師団の師団長は、1939年9月7日に牛島實常中將から七田一郎中將に変わっているが、その七田師団長が復員後に上奏した報告書が残っている。

臣一郎

謹ミテ第二十師団出征中ノ軍狀ニ就キ上奏ス

昭和十五年一月十一日

第二十師団長 七田一郎 花押

第一 作戰ノ經過

師団ハ昭和十二年七月十一日 北支派遣ノ大命ヲ拜シ 七月十八日 主力ヲ以テ天津附近ニ集中シ 支那駐屯軍司令官ノ隷下ニ入ル

七月下旬 南苑ノ緒戦ニ頑敵ヲ撃滅シ 更ニ他兵團ト協力シテ平津地方ヲ鎮定セリ

九月中旬ヨリ 涿州保定會戰ニ次デ 石家莊附近ノ會戰ニ参加セリ

十月下旬 娘子關附近ノ天嶮ニ據レル優勢ナル敵ニ 殲滅的打撃ヲ與ヘ 引續キ之ヲ追撃シテ 十一月

上旬 太原南方地區ニ進出シ 第五師団ノ太原城攻略戰ニ協カス

昭和十三年二月十一日 紀元ノ佳節ヲ期シテ行動ヲ開始シ 靈石附近ノ堅陣ニ據レル優勢ナル敵ヲ撃滅シ

更ニ敵ヲ急迫シテ 長驅 黄河河畔ニ進出ス

爾後 一部ヲ黄河河畔ニ駐メ 主力ヲ以テ直チニ反轉シテ 山中深く 遁入セル敵軍ヲ索メテ 各地ニ之ヲ

撃滅中 五月中旬 優勢ナル敵軍 黄河ヲ渡河シテ 曲沃附近ニ侵入シ 師団ハ近ク之ト相對峙スルニ至リ

シガ 七月上旬 全線攻勢ニ轉ジテ之ヲ撃破シ 引續キ追撃ヲ行ヒ 七月下旬 運城平地ニ進出セリ

爾來 約十一箇月間 運城平地ニ駐屯シテ其ノ防衛ニ任ジ 戰鬪討伐 及治安諸工作ニ力ヲ效シ 運城平地ノ

治安ヲ概ネ確立セリ

昭和十四年六月下旬 運城平地

防衛ノ任務ヲ後任兵團ニ移讓シ

七月上旬ヨリ 軍の企圖ニ基キ

冀城東方山地ニ據レル優勢

ナル敵ヲ撃滅シ 次デ困難ナル

天候地形ヲ克服シツツ 澤州及

高平附近ニ向ヒ 追撃ヲ敢行

シ 七月下旬 澤州附近ニ兵力

を集結ス

八月中旬 澤州西方地區ニ侵入

セル優勢ナル敵ニ對シ 豪雨ト

夜暗トヲ冒シテ 之ヲ急襲包圍

シ 殲滅的打撃ヲ與フ

八月下旬 潞安平地ニ進出シ

爾來 同平地ノ防衛ニ任ジ 概ネ治安ノ根基ヲ確立シ 更ニ此ガ進展向上ニ力ヲ效シツツアリシガ 今次大

命ヲ拜シテ 朝鮮ニ歸還シ 目下復員ノ途上ニアリ



出征間ニ於ケル^総綜合戦果 概ネ左ノ如シ

敵ノ損害

遺棄死體^体 約十三萬^万八百

俘^ふ虜^{りよ} 約四千四百

我ガ損害

戦 死 四千七百四十二 (内 將校 百九十八)

戦 病 死 六百八十六 (内 將校 三)

戦 傷 一萬三千三百七^万 (内 將校 四百五十九)

第二 部隊の状況

一 將兵ハ克^よク 聖^{せい}論^ゆヲ奉^体シ 本次聖戰ノ意義目的ニ關^開シ 透徹セル信念ヲ確握シ 軍紀概ネ嚴正ニシテ 團結^団 鞏^{かた}ク志氣昂揚シ 諸種ノ困難ヲ克服シテ 一意任務ノ達成ニ邁^{まい}進^{しん}セリ

二 諸隊訓練ノ程度 特ニ中隊長以下 下級幹部ノ指揮技能ハ 損耗ニ伴フ補充^{かい} 回^かヲ累^{かさ}ヌルニ從^従ヒ一般ニ低下セルモ 滅^{めつ}私^し奉^{ほう}公^{こう} 勇躍死ニ赴^きクノ氣魄^きニ於テハ 消磨衰頹ヲ認メズ 概ネ所期ノ如ク戦闘ヲ遂行シ得タリ

三 兵器ハ作戰遂行上 遺憾ナキヲ得タルモ 累次ノ戦闘ニ因リ衰損^{すくな} 尠^{すく}カラズ 程度一般ニ低下セルヲ以テ 之ガ復舊整備ニハ一段ノ努力ヲ要スルモノアリ

四 補給給養ハ 師團^団ノ作戰地域 概ネ山嶽^{ちょうじょう} 重^{ちゆう} 疊^{じよう}シ 交通不便ナリシヲ以テ 時ニ意ノ如クナラザリシコトアリシモ 現地物資ノ徹底的利用ニ依リ 作戰遂行上 概ネ支障ナキヲ得タリ

五 將兵ノ健康状態ハ 概シテ良好ニシテ 其ノ體力^体ハ 克^よク氣候風土ノ變化^気 環境ノ不良ヲ克服シ 作戰遂行ニ支障ナキヲ得タリ

六 馬匹^{ばひつ}ハ 連續^続セル作戰行動ニ因リ 戦死馬ノ外 多數^数ノ廢^{はい} 斃^{へい}馬ヲ生ゼルモ 主トシテ現地支那馬ヲ以テ 之ヲ補填シ作戰ヲ遂行セリ 將來^当相當ノ整備ヲ要スルモノアリ

第三 銃後後援ノ状況

銃後國民^国 特ニ朝鮮官民ノ師團^団將兵ニ對^對スル後援ハ 熱烈眞摯ニシテ 内鮮一體^体ノ實^実ヲ發揮^発セリ

おも 惟^団フニ 師團ガ二年有半ニ 互^{わた}ル出征間 轉戰^転毎に 衆敵ヲ撃破シテ 敵軍ノ戦力ヲ衰頹セシメタルト共ニ一般民衆ヲシテ 漸次皇軍ノ威徳ヲ 敬^{けい} 仰^{ぎよう}スルニ至ランメ 以テ 閩^{こん} 外^{がい}ノ (※国外での) 重任ヲ 辱^{はず}カシムルコトナキヲ得タルハ 上司ノ適切ナル指導 及將兵ノ奮戰^{ならび} 並^二銃後國民ノ熱烈ナル後援等ニ依ルモノニシテ 其ノ由^{よつ} 來^来ル所ハ 一ニ 御稜威^{りようい} (※天皇の威光)ノ 然^{しか}ラシムル所ニシテ 洵^{まこと}ニ感激ノ至リニ堪ヘズ

此ノ間 忠勇ナル多數ノ將兵ヲ死傷セシメ 今次歸還^帰ヲ 俱^{とも}ニシ 能^{あた}ハザルモノアラシメタルハ 寔^{まこと}ニ痛^{つう} 惜^{せき}ニ堪ヘザル所ニシテ 深ク 恐^{きよう} 懼^くシアル所ナリ

又 畏^{かし}クモ三度戰場ニ侍從武官ヲ 差^さ 遣^{しつか}ハサレ 優^{ゆう} 渥^{あく}ナル (※ねんごろな) 聖旨令旨ヲ賜ハリ 且御下賜品ヲ拜シ 今次歸還^帰ニ 方^{あた}リテハ 朝鮮ニ侍從武官ヲ差遣ハサレ 優渥ナル聖旨を賜ハル將兵一同 聖恩ノ有難キニ深ク感激シアリ

今茲^{ここ}ニ 天顏^{しせき}ニ咫尺シ (※お目にかかり) 奉^{あた}リ 軍狀ヲ上奏スルニ 方^{あた}リ 臣一郎 感激ノ至リニ堪ヘズ 將來ますます 益^{れい}と奮勵努力シ 以テ聖恩ニ報イ奉ランコトヲ期ス

(参考：その後の第20師団について 続き)

第20師団は1939年12月に北支戦線から復員、中尾敏郎らの在営期間が長くなっていた者はその時点で内地に戻って除隊となり、それ以外は朝鮮の龍^{りゅう}山に帰還した。その後、1941年7月に再び第20師団に動員命令が下り、対ソ戦に備えて待機していたが、1942年12月23日に大陸命第728号により朝鮮軍司令官の隷下を外れて、南洋方面の作戦を担当していた第17軍に編入となり、1943年1月8日釜山を出発した。

〔アジア歴史資料センター
C14060908500 大陸命綴(大東亜戦争)
(防衛省) 画像 47 枚目、および
C12122484000 東部ニューギニア方面
部隊略歴(防衛省) 画像 1~22 枚目〕

それ以降、終戦に至るまでの間、東部ニューギニアにおいて米・豪の連合軍と戦ったが、制空権、制海権を失った中での圧倒的に不利な戦闘と、マラリアなどの疾病や飢餓によって、生還者が5%にも満たないという、悲惨な結果となった。

野砲兵第26連隊は、装備を野砲から山砲に切り替えて、東部

〔戦史叢書第084巻 南太平洋陸軍作戦<5>425頁(画像222枚目)〕

ニューギニアでの戦闘に従事したが、その苦闘ぶりについては、当時の中隊長だった大畠正彦氏著「ニューギニア砲兵隊戦記」(光人社NF文庫)に詳しい(ただし1944年4月に歩兵連隊へ転属以降の状況には触れず)。

(参考：その後の中尾敏郎)

中尾敏郎は、1940年1月8日に除隊後、1月18日から榎本尋常小学校(1941年4月に大阪市立榎本国民学校に改称、現在の大阪市立榎本小学校)の代用教員となり、6月30日には訓導(本科正教員)となったほか、榎本商業青年学校の指導員なども兼任している。国民学校訓導となったことで「戦時召集延期者」に該当して、終戦までの5年半の間、召集による2回目の出征を免れた得たものと思われる。

画
軍令陸甲第46号「陸軍動員計畫令」(昭和18年5月)

第85条 左ノ各号ノ一ニ該当スル在郷軍人ハ、動員計畫上、諸部隊ノ要員ニ充用セザルモノトス。
言
之ヲ戦時召集延期者ト謂ヒ、該戦時召集延期者ハ適宜ノ時期ニ於テ逐次之ヲ召集スルモノトス。

其11 国民学校教員中、必要ナル者 (※ 其1~10、12は引用省略)

〔アジア歴史資料センターC14010766100 軍令陸甲第46号陸軍動員計畫令 昭和18.5.17(防衛省)画像12~13枚目〕

※ 吉田敏弘氏著「赤紙と徴兵」170頁によると、召集延期者制度は一般国民に対しては極秘だったとのこと。

1944年9月には榎本国民学校でも福井県鯖江市への集団疎開が行なわれて〔榎本小学校のホームページ〕終戦を迎えることになった。

なお、中尾敏郎の復員除隊と入れ替わりに、2歳半年下の弟、中尾敬治が徴兵されて1940年2月28日に入営し、3月から満洲での軍務についた。詳しい消息が分からないが、日本に帰れないまま終戦を迎え、帰国難民となって1946年1月3日にハルビンの難民収容所で病死している。

(参考) 中尾敏郎の戦場日記に出てくる人名表 (将兵のみ)

後藤准尉 (少尉)	1937 年 7 月 26 日 (プール)、8 月 12 日 (戦闘結果)、1938 年 1 月 1 日 (正月宴会)、1938 年 5 月 13 日 (重傷)、8 月 11 日 (六堡鎮の思い出)
藤井少尉	1937 年 8 月 20 日 (乾麺パンもらう)、1938 年 1 月 23 日 (観測小隊、野球)、4 月 20 日 (徒歩教練)、1938 年 5 月 13 日 (重傷)
酒井古兵	1937 年 8 月 20 日 (弾丸受領)
野村	1937 年 8 月 24 日 (観測所へ)
(村木)中隊長	1937 年 8 月 29 日 (パイナップル貰う)、1938 年 3 月 4 日 (転任)
梅木少尉	1937 年 8 月 29 日 (氷砂糖貰う)
松岡	1937 年 9 月 2 日 (芋むし)、1938 年 3 月 2 日 (借金)、3 月 30 日 (散歩)
本田准尉	1937 年 9 月 3 日 (小包受取)、1937 年 11 月 27 日 (笑われる)、1938 年 1 月 1 日 (正月宴会)、1938 年 5 月 11 日 (点呼)、1938 年 7 月 5 日 (総攻撃)、1938 年 8 月 9 日 (砲撃指示)
高見古兵	1937 年 9 月 9 日 (整備人員)
寺尾古兵 (上等兵)	1937 年 9 月 10 日 (中隊長に幹旋)、1938 年 9 月 15 日 (門の下敷き)、10 月 29 日 (日記は持ち帰れず)
村田	1937 年 9 月 16 日 (再会)
中川上等兵	1937 年 9 月 16 日 (再会)、1938 年 12 月 31 日 (かしわ屋)
阿部	1937 年 9 月 23 日 (再会)、1938 年 5 月 13 日 (戦死)、10 月 24 日 (中隊慰霊祭)
南畑	1937 年 9 月 23 日 (再会)
春岡	1937 年 9 月 30 日 (捕虜)、1937 年 12 月 7 日 (分射)、1938 年 2 月 20 日 (散髪)
田中喜一	日の丸の寄せ書き、1937 年 10 月 11 日 (再会)
大橋	1937 年 10 月 12 日 (豆入手)、1937 年 12 月 3 日 (ナイフ)、1937 年 12 月 12 日 (弁当)、1938 年 1 月 26 日 (石炭取り)、1939 年 4 月 30 日 (行軍)
吉岡曹長	1937 年 12 月 6 日 (会えず)
平野	1937 年 12 月 7 日 (分射)
別宮	1937 年 12 月 17 日 (将棋)、18 日 (将棋)
山田	1937 年 12 月 19 日 (二分隊の演芸)、1938 年 1 月 1 日 (演芸)、4 月 18 日 (演芸)、8 月 18 日 (演芸)
川岸師團長	1937 年 12 月 21 日 (巡視)、1938 年 10 月 23 日 (回想)
小田 (上等兵)	1937 年 12 月 31 日 (絵描き)、1938 年 12 月 31 日 (画家)
浦林上等兵	1938 年 1 月 1 日 (囲碁)、1938 年 1 月 1 日 (囲碁)
井海班長	1938 年 1 月 7 日 (執銃教練)
細川部隊	1938 年 1 月 9 日 (永祭)
高橋古兵 (清やん)	1938 年 2 月 21 日 (ぜんざい)、1938 年 8 月 27 日 (戦傷者病院)、1939 年 1 月 1 日 (隣で寝ていた)、1939 年 3 月 (再会)
植田軍曹	1938 年 2 月 23 日 (教官・戦死)
押川大尉	1938 年 2 月 23 日 (一中隊・やられた)
井上	1938 年 3 月 30 日 (散策・写真屋)
平沢上等兵	1938 年 4 月 18 日 (管弦楽)
安藤	1938 年 4 月 25 日 (馭法)
寺西	1938 年 5 月 7 日 (落馬)、1938 年 10 月 1 日 (歩哨)、1939 年 3 月 (虞郷から転地)
笠毛上等兵	1938 年 5 月 15 日 (射撃用意)
牛嶋師團長	1938 年 7 月 1 日 (赴任)
番三木	1938 年 7 月 27 日 (暴発死亡)、10 月 24 日 (中隊慰霊祭)
石田	1938 年 8 月 18 日 (浪波節)
川島	1938 年 8 月 18 日 (裏町の人生)
本田	1938 年 9 月 20 日 (合わし柿)
倉本	1938 年 9 月 30 日 (風呂工事)
乾野上等兵	1938 年 10 月 9 日 (使役予定)
川崎 (初年兵)	1939 年 1 月 1 日 (オンドル)、3 月 (虞郷へ転地)
田中 (初年兵?)	1939 年 3 月 (虞郷へ転地)
平本	1939 年 3 月 (虞郷から転地)
竹中伍長	1939 年 4 月 30 日 (4 分隊・負傷)
前田上等兵	1939 年 4 月 30 日 (招集兵・負傷)